

社会・地域・暮らしをつくるマガジン

まじくる

2012

12

月号

特集

生活支援戦略について考える

① 生活支援戦略とは何か？

厚生労働省 地域支援福祉課生活困窮者自立支援室
熊木正人さんに聞きました

② 就労支援先取り事例

地域起業創造センターまじくる

③ きびしい状況の家庭で育った、 若者たちのリアルトーク

自立していくために大切なこと

● まじくるんの基礎講座

「当事者が活躍できる」支援体制をつくらう！

● 「何でも」を検証する／朝比奈ミカ

● マンガ まじくるんが行く

● 異分野対談 セクシャルマイノリティ×発達障がい専門家

● 制度のこともくっちゃべるんだべよ／又村あおい

● 高校生が先生に聞きました「北海道大学大学教授 宮崎隆志」

特集

生活支援戦略について考える

①「生活支援戦略」とは何か？

厚生労働省 地域支援福祉課生活困窮者自立支援室
熊木正人さんに聞きました1

② 就労支援先取り事例

地域起業創造センターまじくる8

③ きびしい状況の家庭で育った、 若者たちのリアルトーク

自立していくために大切なこと16

- ・マンガ まじくるんが行く22
- ・まじくるんの基礎講座
「当事者が活躍できる」
支援体制をつくろう！23
- ・「何でも」を検証する②
朝比奈ミカ34
- ・異分野対談
セクシャルマイノリティと発達障がい専門家に聞く
生きづらさを想像できる
支援のために39
- ・制度のことでもくっちゃべるんだべよ②
又村あおい44
- ・高校生が先生に聞きました
北海道大学 宮崎隆志 教授に「社会教育」について聞く
.....48

編集後記

「生活困窮者」という言葉が政策の中にたくさん登場するようになりました。教育や福祉の実践の中では「生きづらさ」という言葉も聞かれるようになりました。それだけ、今の社会で当たり前生きていくことが難しい現状があり、それを支える仕組みも機能不全を起こしています。ただ、そうした苦しい実感は「何とかしたい」「困っている」というようなヘルプコールとして表現されたり、表面化されたりするのではなく、不安や焦り、他者へのきびしい視線や攻撃、あきらめ、自責や自傷、特定の相手への批判や責任追及など、さまざまな負の表現として表面化することが多くなっています。

そんな不安でいっぱいの時だからこそ、私たちは自分たちの感性や思考をフル回転して、一体、今の社会はどうなっているのか？ 自分たちはどんな状況におかれているのか？ これからの社会をどうしていったらいいのか？ 自分たちにできることは何か？ しっかりと向き合うことから始めるしかありません。現実と向き合い、行動を起こすことで誰もが今の時代に生きる「当事者」になることができます。たくさんの当事者の出会いと、対話・協働が促進されるよう、発信します。

(日置 真世)

これを読んでいる
君はどんな立場だろう？
地域で何かの活動を
している人たちかな？
生きづらさを抱えている人たちを
応援している人も多いよね。
ひょっとしたら、社会が自分にとっては生きにくくて
悩んだり困ったりしている人かもしれないよね。
あとは、そうした研究をしている人もいるだろうし、
行政の立場で関わっている人もいるかもしれないね。
いずれにしても、みんな「生活当事者」なんだ。
そう、僕は広い意味で社会や地域や暮らしの
ことを考えて何とかしようと行動する人を、
立場や肩書や所属に関係なく「生活当事者」っ
て名づけて、いろんな生活当事者がつながったり、
まじくったりする機会を仕かけているのさ！
まあ、この雑誌もその仕かけ
の一つってわけだよ。
一緒にこれからの社会や
地域や暮らしを考えていく
きっかけになると
嬉しいな。



「生活支援戦略」とは何か？

「生活支援戦略」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？
 社会のさまざまな状況の変化から生活が苦しくなる人たちが
 増えて、その支援策が求められており、そのための新しい政策
 として議論されているのが「生活支援戦略」です。2012年
 7月、中間報告が出たばかりですが、いったいどんな内容で議
 論がどのように進んでいるのか、厚生労働省の地域福祉課生活
 困窮者自立支援室室長の熊木正人さんに本誌編集長の日置真世
 （ひお）が聞いてみました。

厚生労働省
 地域支援福祉課生活困窮者自立支援室
 熊木正人さんに聞きました

二つの目的を一緒に

ひお 今日、「生活支援戦略」を高校生に
 でもわかるように説明してもらいたいと思っ
 てきました。私はある程度は知っているの
 ですが、あえてこういうことをあまり知らない
 人の立場になって聞こうと意識してみますの
 で、よろしくお願いします。

まずは、ズバリ「生活支援戦略って何？」
 でしょうか。

熊木 図1を見てもらおうとわかるのですが、
 目的は大きく二つあります。

一つは、「生活保護制度」を国民の信頼に

応えられるようなものにする。

ひお 生活保護をめぐるのはいろいろと物議
 がありましたね。お笑い芸人の家族が生活保
 護を受けていて騒ぎになったりしたことが影
 響しているのですか？

熊木 そうですね。そういうこともあります
 が、全体的に生活保護を受ける人たちがどん
 どん増えるなかで、生活保護制度に対する国
 民の「納得感」がないのは確かです。生活保
 護基準以下や同じぐらいの低い所得で生活す
 る人たちがいるなかで、生活保護制度を多く
 の人たちが納得できるものになければなり
 ません。

ひお でも、例の芸能人の家族の話も不正と

いうわけではないですし、不正受給は全体の
 ほんの一部ですよ。生活保護についての報
 道は偏っているように思いますけどね。そ
 ういった報道の影響で、本来受給を受けなけ
 れば生活できないような人たちが追い詰めら
 れ、不安の声も多く聞きます。

熊木 報道機関の皆さんには、私たちがきち
 んと説明しなければなりません。ただ、多く
 の人たちに信頼される制度になっていないこ
 とはなんとかしなければなりません。

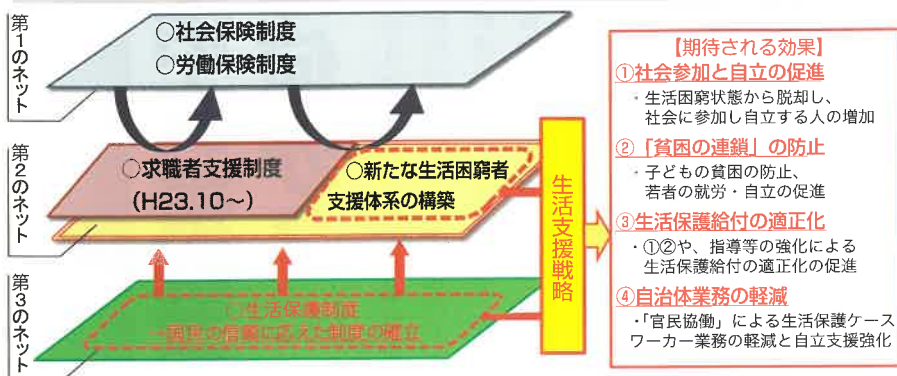
一方で、今回の生活支援戦略は生活保護の
 見直しだけではないもう一つの大きな目的が

図1「生活支援戦略」の基本的な方針

【「生活支援戦略」中間まとめ（抜粋）】

○基本目標

- ・生活支援戦略では、生活困窮者が経済的困窮と社会的孤立から脱却するとともに、親から子への「貧困の連鎖」を防止することを促進する。
- ・国民一人ひとりが「参加と自立」を基本としつつ、社会的に包摂される社会の実現を目指すとともに、各人の多様な能力開発とその向上を図り、活力ある社会経済を構築する。
- ・生活保護制度については、必要な人には支援するという基本的な考えを維持しつつ、給付の適正化を推進する等によって、国民の信頼に応えた制度の確立を目指す。



あります。それが「第二のセーフティネットの強化」というものです。

ひお 「第二のセーフティネット」というのは？

熊木 図1のとおり、生活に困ることがないように支え合える仕組みとして社会保険と労働保険がありますが、それが「第一のセーフティネット」です。病気になるときに保険

を利用して安心して医療を受けられたり、高齢になったら年金がもらえたり、いろいろな都合で仕事を辞めても失業保険が受けられたり、「健康で仕事があり、生活が継続的に成り立っている状態」から危機的な状態に陥ってもそれを救い出す仕組みがあったわけですね。しかし、そうした仕組みは、世の中の大多数の人たちが通常は「健康で仕事があり、生活が継続的に成り立っている状態」であるという前提で機能していましたが、今のように精神疾患が増えたり、健康な人でも仕事がないような経済状況であったり、またそうした社会保険や雇用保険の対象にならない非正規雇用で働く人たちがすごく増えてしまうと、それらがセーフティネットとして機能しなくなってしまうのです。

それでも、日本社会には「生活保護制度」という最終的なセーフティネットがありますから、そこでは救われるようになっていきます。図1では「第三のセーフティネット」ですね。しかし、この第一と第三の落差が大きいわけです。

ひお そこで、この第二のセーフティネットが登場したというわけですね。

熊木 そうです。2011年10月から「求職者支援制度」が始まって

いますが、これではまだまだ不十分です。この第二のセーフティネットを充実させなければ、どんな生活のきびしい人たちが増えていってしまい、生活保護費もふくらむ一方になります。この第二のセーフティネットの整備が今、急務になっているのです。これは、生活保護の見直しと一緒にやらなければなりません。

ひお なるほど。生活保護の見直しと第二のセーフティネット整備とは別の問題だけれど、時代の状況上、一緒に取り組もうというわけですね。まずは、従来の仕組みでは支えきれない生活がきびしい人たちが増えている現状を何とかしなくてはいけないわけですね。それは、私も地域で活動をしていて実感としてとてもよくわかります。

そういう現実がある大きな背景は産業構造の変化ですか？

熊木 そうですね。一次産業、二次産業のよくな比較的単純作業で、人と複雑に関わらなくともいいような仕事が多くなっています。その代わりに三次産業のウエイトが高くなっています。

ひお グローバル社会の影響で、農業も製造業も人件費がかからない海外にどんどん移っていますよね。企業そのものも激しい競争などきびしい状況で、効率をさらに高めなくてはなりません。人間的にもギリギリでやるしかないもので、ゆつくりと育てている余裕がありません。コストが継続にかかる正規職員



熊木正人 (くまき まさと)

平成5年 厚生省(当時)入省後、老人保健福祉局介護保険課課長補佐～障害保健福祉部企画課課長補佐～大阪府福祉部(介護支援課長、障がい福祉企画課長を経て今年4月から現職(生活困窮者自立支援室長)に至る。

趣味はスポーツ モットーは「難しい仕事を明るく楽しく」

生活支援策の充実については、新しい分野ですし、人によって考え方の違いがあって難しい課題ですが、現場のさまざまな人と真剣に議論することが楽しみです。忙しい中でも幸せだと思っています。

を増やさずに、派遣やパートや季節労働などの非正規雇用者で調整をするような経営形態も一般化していますよね。

熊木 あとは育つ環境の変化などで、若者たちが打たれ弱くなってしまうなどの変化もあるように思います。

ひお 働く場の現状もきびしいし、働く側の人の状況も変わっているってことですかね？それに対応できるような新しい政策が「生活支援戦略」ということですが、どんな戦略なのでしょう？

熊木 新しい「制度」をつくろうとしています。つまりは新しい法律をつくって、全国に生活困窮の方たちを支える仕組みを整備します。今は、モデル事業で試験的な事業で限られた地域でやってもらっていますが、そうした方法には限界があります。恒久的な制度にして、しっかりと支援体制をつくりたいのです。

ひお 法律をつくるといっても、なかなか大

変そうですね。時間もかかるのではないのでしょうか？

熊木 簡単ではありませんが、これは絶対にやらなければならないことだと思っています。法律はすぐにはできないので、現在の予定では来年には法律案を国会に提案して、具体的な制度化は平成27(2015)年度から本格的にスタートできることを目標にしています。それまでは、今やっているモデル的な取り組みを徐々に広げていくつもりです。

ひお モデル事業は「パーソナル・サポート・サービスモデル事業(以下PS事業)」のことですよね。

熊木 そうです。今、PS事業で実施している「総合的な相談窓口」が、この生活支援戦略の大きな目玉事業だと思っています。

縦割りを越える相談窓口としての総合相談支援センター

ひお 総合的な相談窓口というのは簡単に「困っていることを何でも相談できるところができる」と考えてもいいですか？

熊木 そうです。困っている人たちが我慢して状況を悪化させることなく、早期に把握することが目的です。だから、単に「窓口がありますから、来てください」というものではありません。アウトリーチをととても大切にします。

ひお アウトリーチとは、つまり受け身で相談を待っているのではなく、困っている人た

ちがいる場所に出向いていくような取り組みですね。関係機関を定期訪問したり、炊き出しや公園、インターネットカフェなどの困っている当事者がいそうな場所を巡回したり、相談会を開いたり。また、最近では定時制の高校なんかで定期的な出前相談をしている取り組みも聞きますね。

熊木 はい。そういった積極的に困っている人たちの所へ出向いていこうという姿勢を重視しています。それから、「包括的」かつ「伴走型」の支援も特徴です。

ひお 「包括的」というのは「全体的に包み込んで」みたいなイメージがありますが、具体的にはどういうことでしょうか？

熊木 これまでの福祉のさまざまな支援策は、対象別、分野別でつくられてきました。高齢者、障害者、子ども、母子家庭、生活保護など対象者を明確に定めて、その対象者別に法律も支援窓口もサービスもつくられてきたわけですね。それにはそれなりの理由や意義がありました。でも、社会状況の変化の中でそういった分野にはあてはまらない人たちが増えてきました。また、複雑にいくつもの課題をもつ人たちもいて、どの分野にもあてはまりそうで、うまくあてはまらなかったりという不具合も出てきたのです。

ひお それはいわゆる「縦割り制度の限界・課題」というのです。制度の隙間とか、たらいまわしという言葉も聞きます。つまりは既存の制度が時代に合わなくなったというこ



図2 総合的な相談と「包括的」かつ「伴走型」の支援

【「生活支援戦略」中間まとめ（抜粋）】

○経済的困窮者・社会的孤立者の早期把握

経済的困窮者・社会的孤立者を早期に把握し、必要な支援につなぐため、地域のネットワークの構築や、民間事業者・公的機関と地方自治体との連携強化、**縦割りでない包括的な総合相談体制の強化**等を図る。

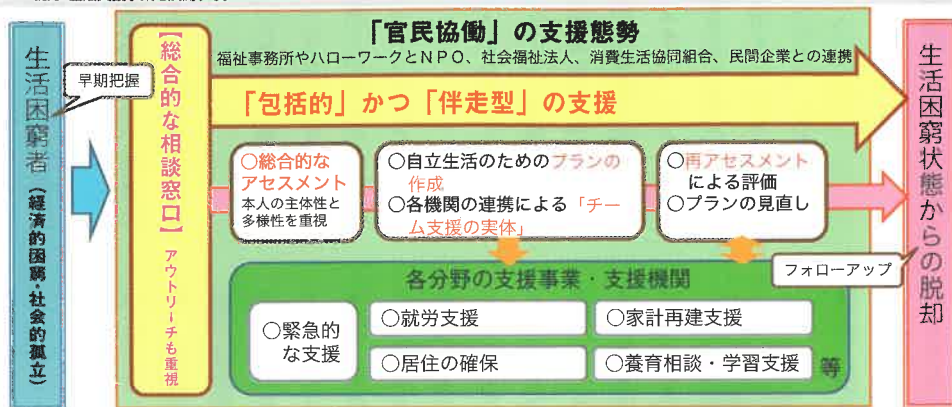
○初期段階からの「包括的」かつ「伴走型」の支援態勢の構築

初期段階から、「**谷間のない総合相談**」や「**待ちの姿勢**」でない訪問型支援（アウトリーチ）、チームアプローチによる支援を展開し、

「包括的」かつ「伴走型」の支援態勢を築く。

○民間との協働による就労・生活支援の展開

これまでの公的機関による支援だけでなく、**NPOや社会福祉法人、消費生活協同組合、民間企業、ボランティア等の「民の力」との協働**により、就労・生活支援事業を展開する。



とでしょうか？

熊木 そういふ側面もありますね。そうした縦割りの問題が生じないように、新しい制度では生活上のどんな問題に対してもワンストップで受け止めるという意味で「包括的な」対応をします。

期限が定められず継続的な支援体制

ひお では、もう一つの「伴走型」というのはどういうことですか？

熊木 困りごとを抱えている人の立場やペー

スに寄り添っていくという意味合いと、年齢や期限が機械的に決まっているのではなく継続性をもつ、という意味があります。

ひお なるほど。既存の制度では、たとえば生活保護のケースワーカーさんは生活保護を受けている間に対応してくれますが、生活保護が切れたら支援はおしまいですし、児童相談所も18歳を超えると、支援が切れてしまいますよね。その後に大変なことに陥ってしまうというケースは、私もたくさん見てきました。

熊木 そうなんです。そして支援の隙間に落ちて困窮するような人たちをできるだけ早くに見つけ出し、支援体制をつくっていくのが「総合相談支援センター」の大きな役割です。それから、もう一つ大切なことはそこでの支援のプロセスです。困窮している人たちを見つけ出しても、

その後の対応策がないといけませんので。

ひお それはそうですね。総合相談支援センターでは具体的にどんな支援をしていくのでしょうか？ その方法や内容がとても重要だと思います。

熊木 そのとおりです。具体的には「ケアマネジメント」という手法を使うのが基本です。

ひお ケアマネジメントなら私は障がい者支援の分野でよく知っています。一人ひとりの状況に応じて、信頼関係をつくりながら、課題の背景や本人の思いを把握して（アセスメント）、計画を立てて（プランニング）、実際の支援を実施し（プランの実行）、計画の見直し（モニタリング）をするなど、本人の意思を尊重しながら、支援チームをつくり、いろいろな人たちと課題を共有しながら進める方法ですね。ケアマネジメントのプロセスをしっかりと実行するのはとても有効だと思います。

熊木 はい。そのプロセスをしっかりとやってもらいます。しかも、そのプロセスに自治体が必要関与していくことが今回の生活支援戦略の大きな特徴です。

ひお なるほど。自治体とは市町村ですか？都道府県ですか？

熊木 基本は市町村を考えています。ただ、小規模な自治体はどうするのかという議論はしています。



自治体と協働で

ひお 私の素朴な疑問としては、先ほどの縦割りの問題がありました。これまで窓口や管轄が分かれていたわけですね。市町村が関与していくといっても、どこの部署が担当になるんだろうかと思いますが、どうなるのでしょうか？

熊木 それは一つ悩みどころです。いくつかのパターンがあると思います。私たちが具体的にここにしてくださいと一方的に決めるよりも、むしろ市町村の事情に応じて柔軟にどこがもつのかを検討できるようにしたいですね。

ひお それはいいと思います。どこが担当するのがその地域にとつてうまくいくのかを地域で考えられる裁量があることは大賛成です。何といつても「何でも相談」を受けるのですから、非常に守備範囲が広くなりますよね。さらに、ケアマネジメントの手法を使っていくと、最終的には「地域づくり」に取り組まなければならなくなります。

熊木 そのとおりです。いろいろな人たちの生活課題を相談によって拾い上げ、それを解決するために地域のいろいろな人たちが連携して取り組むわけです。具体的には生活を支える人や機関、多様な就業先や地域の見守りやネットワークなどいろいろなものが必要になります。そうしたものを「官民協働」で整

備していくことも大きな目的です。それらが整っていくことがまさに「第二のセーフティネット」ができるイメージです。

具体的な支援策も検討し新しい就労支援の仕組み

ひお 総合相談支援センターだけではなく、実際の支援のための事業が登場するようですね。

熊木 はい。今回はいくつかの生活支援事業を新しくつくるつもりです。今のところ、検討されているのはシエルトや一時的な食べ物の提供などの「緊急的な支援」「就労支援」「居住支援」「家計再建支援」「子どもたちへの学習支援」などです。なかでも特に「就労支援」には力を入れようと思っています。

ひお 「中間的就労」という言葉が出てきているようですが、それはどんなものなのですか？

熊木 すぐに企業に就職するなどの一般就労が難しい人に対して、人と関わる練習をしたり、仲間をつくったりなどの社会に出るためのスキルやモチベーションを育てる内容を盛り込んだ就業体験活動のようなものを提供します。実際に仕事に近い内容の活動をしながら、収入も一部得ながら、経験も積むようなものです。これは、生活が困窮している方たちがいろいろな背景や事情があり、就労をめざすのにもそれぞれのステージがあり、その段階に応じたきめ細かな支援が必要になっていくことが背景にあります。また、中間的就

労の前の事業として「就労準備支援事業」というものも考えています。これは、日常生活や社会的なスキルなどのごく基本的なことについて、就業体験や支援者との関わりを通じて学ぶようなイメージです。たとえば、毎朝決まった時間に起きるとか、あいさつができるようになるとか。

ひお 釧路市でも2年間で内閣府のモデル事業でインターンシップ事業を行ったので、就業準備の支援がとっても大事なことはよくわかります。でも、そこでは朝起きるとか、あいさつとか訓練的な内容よりも、自分のことを認めてくれる人がいるとか、同じようなことである仲間がいるとか、一人じゃないと思うことで、ぐっとモチベーションが上がっていくました。指導とか訓練といった内容よりも自立をめざす人たちに、自然な形で人間関係や経験を増やすきっかけやチャンスを提供できるか、というイメージだと思います。

熊木 なるほど、そうですね。やはり、総合相談支援センターを中心とした伴走支援が大事になるかもしれませんね。いずれにしても、雇用情勢がきびしい背景もあるので、なかなかすぐに就業をめざすことが難しい現実がありますので、段階的にそれぞれの状況に応じて自立を確実にめざしていける体制が必要ですね。



貧困の連鎖を断ち切る

ひお 貧困の連鎖の防止にも力を入れるようですね。私も困窮家庭で育つ子どもや若者にたくさん出会っているので、非常に関心があります。

熊木 今回の仕組みは「早期発見と支援」が重要だと思っていますので、子どもや若者への支援はその代表のようなものです。困窮家庭の子どもたちへの学習支援や学校と支援機関が連携して、支援に取り組み例も増えてきました。でも、まだまだ一部の実践者の頑張りに支えられている面があるので、これもしっかり体制をつくって広げていきたいものですね。

ひお 教育との連携はとても重要だと思います。また、学習支援や居場所だけではなく、家庭から離れて暮らせる生活寮のようなものを含めた生活支援も必要になると思います。生活基盤が安定しないと、子どもたちは自立に向かつていきませんから。

熊木 それはそうですね。子どもや若者への支援は総合相談支援センターと同様にアウトリーチを重視した総合的な相談体制を整えようと思っています。しっかりとニーズを受け止める仕かけをつくろうというものです。そこで、実際に困っていることを受け止めて、今後の地域づくりへつなげていけるようにしたいと思います。でも、何でも一度にはできませんから、まずは着実に基本的な仕組みだ

けはしっかりとつくりたいですね。

ひお そのためにはやっぱり、「総合的な相談支援体制」がかなり重要ですね。その機能が核となって地域ならではの取り組みが展開されるようになると、生活困窮ということだけではなく地域のいろいろな課題を共有しながら、みんなで力を合わせて取り組むきっかけになるのではないのでしょうか。これは、かなり画期的な仕組みだと思います。縦割りの弊害に苦しみながら、現場で取り組んできた立場としては、大きく期待をしていますが、同時にかなりなチャレンジなのではないかと心配でもあります。今後、制度化を進めていくうえでの課題は何でしょうか？

制度化に向けてチャレンジ

熊木 本当に大きなチャレンジだと思っています。課題はたくさんありますが、大きくは二つです。一つは「国もお金の余裕がない」ことです。これはかなり大きな課題です。制度にするということは恒久的な支援体制をつくることです。毎年それなりの予算が必要となります。そのための予算確保をどうするのか、また費用対効果も求められます。

ひお 私は生活支援戦略がしっかり立てられると社会的コストは削減できると思いますよ。現場感覚でよくわかります。今の問題はあまりにも対処療法的になっていて、うんと大変な状況になってから大きなコストをかけて支援するというやり方です。困難がそれほ

ど深刻になる前に支援につながれば、ちょっとした支援で自立できたり、立ち直ったりできます。それから、地域づくりの体制が意識されることによって、社会資源が発掘されたり、取り組みが広がったり、有機的なつながりができたりします。これまで、縦割りで別々にやっていた取り組みが一元化されて効率化されていくようなものだと思います。

熊木 私もそう思います。もう一つの大きな課題は実施主体として想定している市町村がどれだけ本気になるかです。新しい体制のイメージを見ると、市町村の中には「こんなことはとてもできない」と思ってしまうところもあるようです。モデル事業で取り組んでいるようなところは具体的な問題意識やイメージもわいて、「これはとても重要なことだ」と思えるかもしれませんが、今まで意識していなかったところは大変だと思ってしまうのです。実践をしている民間組織の動きや存在も地域によってバラバラですしね。

ひお やったことのないところが急に組み込むのは難しいでしょう。私は自治体でまずはプロジェクトみたいな準備会をつくって、地域事情のアセスメントをして、どうやって生活支援戦略を実現していくののいいかを検討してみたらどうかと思います。準備のプロセスが絶対に必要です。そういったプロセスを国が推奨してくれば、必要であれば私たちのようなすでに取り組んでいる地域の者たちが準備のお手伝いをしますよ。



「踊り場の創出」

楠部武俊

一般社団法人釧路社会的企業創造協議会事務局担当
元釧路市福祉部生活福祉事務所生活支援主幹

社会保障審議会特別部会で議論されている「生活支援戦略」は「生活保護」と雇用保険など「社会保障・社会保険」の間に位置する「第二のセーフティーネット」と言われている。(1)「生活困窮者支援体系」と(2)「生活保護制度の見直し」を柱とした生活支援戦略は、(1)において「プロセスである生活への支援を制度化する」という点で新しい。ここでは官民一体となった「中間的就労」と「支援体制構築」がポイントだ。中間的就労は、従来の「一般就労か給付だけ」を越えて、「働き」が収入とともに当事者の「自尊・承認・役割」など労働の場がもつ人間回復の意義を当事者に保障する意味をもつ。支援の体制は、公的部門とNPOや労働・社会福祉諸団体など地域の諸資源がそれぞれの役割と文化の違いを越えて手をつなげるか。自らを可視化し、自らの足りなさを開示し、「いっしょにやろう」という福祉事務所などの公的部門のイニシアティブによって官民共同の踊り場を生み出すことが胆である。そうした積極的な(1)に比べ後段の「生活保護制度の見直し」には「不正受給対策」あるいは「受給の資格化」と懸念されることが色濃く、生活支援戦略のダイナミズムを欠いている。不正受給を根絶することは論を待たないが、同時に福祉事務所のそもそもの理念であり今や泥まみれになった感のある寄り添う福祉事務所の復権こそ今般の生活支援戦略の隠れたテーマであることを自覚したい。

何だか、画期的で大いに期待ができそうな仕組みが制度化に向けて検討されているんだね。

今の社会の仕組みが実態と合わなくなり、かなりの機能不全を起こしているのは明らかだよ。そのために、チャンスを奪われて、苦しい状況に追い込まれている人たちがたくさんいるのが実情なんだ。

これから少子高齢化が進み、みんなで社会を支えていくことが必要だから、誰もがもっている力を発揮できる新しい仕組みができると本当にいいなあ。まだまだ検討段階だから、多くの人たちが議論に積極的に参画し、建設的で中身が濃い検討が望まれるね。



熊木 いろいろな課題はありますが、何とか頑張って制度化をしたいと思っています。これからさらなる検討を進め、平成24(2012)年には提案内容を取りまとめます。来年には国会に法案を提出したいと思っています。情報は厚生労働省のホームページでも発信していますので、そちらを見てください。

ひお 各地でもいろいろな人たちが興味をもつて、この流れに注目して議論や準備を進めていけるといいですね。応援したいと思います。



北海道釧路市は2011年5月に有効求人倍率^{*1}が0.38倍と全国平均を大きく下回り、「雇用問題」が地域の大きな課題となっています。家とハローワークとの往復のみで先が見えないなか、経済的には困窮し、精神的には孤立していく市民が後を絶ちません。「地域起業創造センターまじくる」(以下、「まじくる」とします)はそうした市民のニーズから2010年5月に誕生しました。参加者の声と参画を前提にこれまでの就労支援のスタイルに縛られずに試行錯誤を続けています。生活支援戦略では「就労支援」が強化される予定ですが、地域の先行実践の一つの例としてその魅力や特徴を紹介します。

就労支援 先取り事例

地域起業創造センターまじくる

特徴1

ダイアログ式メニューフリー!?

「まじくる」は内閣府地域社会雇用創造事業のインターンシップ事業を活用し、スタートしました。研修期間は1期6週間。前半の約4週間は、主にセンターでの研修、残り約2週間は企業やNPOなど実際の現場で就労体験を行うのが標準的なスタイルです。ただし、一人ひとりの生活状況やペースに考慮し、1コマ90分×120コマの単位を履修することでも修了できる、単位制も取り入れました。研修といってもプログラムがあらかじめ決まっていらないのが大きな特徴。研修生もスタッフも対話をしながらプログラムを検討、実行していく「ダイアログ式メニューフリー」のインターンシップなのです。スタッフ・研修生という役割にもとらわれず、双方向のコミュニケーションを通して、研修を共に創り、進めていくことが重要視されます。具体的に実施されたプログラムは幅広く、自己理解や自己尊重、他者との関係性を振り返るといった内容から、地域性を議論してソーシャルビジネスを考えるなど起業に向けた経営学までさまざまです。また、研修の中では「自分はどう感じたか?」を互いに言葉にすることで、振り返り、認識していく機会を大事にし、スタッフも同様に自分たちの仕事を振り返ってきました。

特徴2

「雰囲気」「関係」を大切にするプロセス

最初、研修生は緊張や不安、警戒心をもってやってきます。よって、全員で協力して行う内容を中心にアイスブレイク^{*2}要素を多く取り入れて実施します。参加型の研修で緊張がほぐれ、これからの研修に参加しやすい雰囲気づくりや関係づくりを意識し、学びの場の基礎をつくっていきます。

2週間を過ぎるあたりで、一人ひとりと1対1で話をする機会「茶話会」を設けます。研修を通して自分が何を感じ、これからどうしたいのか本音で語り合うためです。これは一般的な個人面談とは異なり、リラックスして気楽に話ができるようにしています。これによって、スタッフと研修生の関係性が深まり、その後のプログラムを個々のニーズに応じて効果的に組み立てたり、フォローしたりすることが可能になります。

3週目ぐらいにはダイアログカフェで後半の実地研修の目標や計画を立てたり、研修について確認し、一緒に考えたりする機会を設けて、残りの3週間の展望を共有化します。研修の後半には研修生同士や全体としての雰囲気も熟成されていき、同時に実地研修に積極的に参加する人から引き続きセンターでじっくりと研修を行う人など、参加スタイルが多様になっていきます。



具体的な研修内容の例

ダイアログカフェ

まじくるの研修の基礎となっているのがダイアログカフェ。

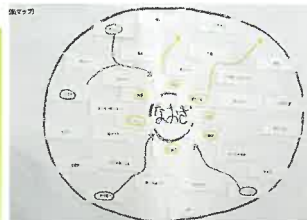
テーブルごとに自ら議論したいお題を決めて、お茶やジュースを飲んだりお菓子を食べたりしながら、ワイワイと話し合いをします。共に学びあい気づき合うことで誰もが主役であることを共感できる“場”になっていきます。最後には必ずそれぞれが発表し合うことで全体としての一体感も意識されます。



自分マップ・他人マップ

自分マップは自分の性格の要素を用紙を使ってマッピングし、それをもとにありたい自分や自分の嫌な面などを可視化していきます。それに対して他人マップは、他人に自分のことをマッピングしてもらいます。研修生やスタッフ同士の関係性ができてから、本人がいないところで数人でワイワイ話をしながら分析します。できあがってから本人が見てびっくり！自分の知らない自分がそこに…!?

いずれも、自分の性格について考えるキッカケをつくり、自己理解を深めることができると同時に相互理解や関係づくりにもつながります。



インタビューゲーム

ペアになって「話す役」と「聴き役」に分かれ、交互にインタビューをします。インタビュー後は、相手の立場になって、内容を要約して、コンパクトな文章に編集します。お互いその内容を確認し合ってから、全体に発表します。「聴く」「話す」「まとめる」「人前で話す」などいろいろな要素のトレーニングとなります。また、伝える側と受け取る側では認識や見方が異なることにも気づく機会にもなります。



皆がチューター

それぞれが、今まで経験したことや、職業・特技・趣味など、テーマは日常生活から社会現象、ミクロから宇宙、とにかく何でも OK。その人がもっとも得意なことを決められた時間を有効に使って皆の前でプレゼンする「出番のコマ」です。話す人の意外な一面が見えるなど研修後半だからこそ一人ひとりの個性や存在感、そして醸し出された関係性が威力を発揮する貴重な機会となります。



スポーツのコマ

研修生が企画、段取り、実施のプロセスすべてを担う「研修生のコマ」で地域の社会資源としてのスポーツ施設にスポットを当て、調査・活用するという『ソーシャルなスポーツ活動』のプログラムとして定着しました。終わった後の爽快感や「楽しかった～」という声があちこちから出る人気のコマです。元気に就職活動するためのモチベーションアップに大きく貢献しています。



※ 1 有効求人倍率：ハローワークの登録求人者数（有効求人者）に対する求人募集をしている企業（有効求人数）の割合を示す指標。

釧路市の 0.38 倍とは、求職者 100 人に対して求人募集が 38 しかないことを示している。

※ 2 アイスブレイク：グループワークなどの前に参加者同士のコミュニケーションの促進のためのちょっとしたプログラム。



居心地のよい場所

よりそい

まじくるでは物事を押しつけて、強制することを行いません。過干渉にならないようにその人自身の主体性をもち、引き出せるような関わり方を意識しています。まじくるに通うことで、スタッフが何かが教えてもらうのではなく、まじくるにいる人がそれぞれの存在を認め、お互いに学び合うような仕掛けづくりをしています。

共感

まじくるにはさまざまな経験をしている方がいらっしゃいます。そのなかには楽しかった経験もあれば嫌な経験や苦い経験もたくさんあります。「自分はこうだった」「自分もそうだ」という当事者であることで、相手の気持ちを思いやる「やさしさ」が生まれ、相手の気持ちに寄り添い、共感することができると考えてます。

もとになるもの

スタッフが
大事にしてきたこと

振り返る

日常生活の中で日々を振り返るということは意識しない限り難しいものです。毎日を評価するのではなく、指摘し合うのでもなく『振り返る』。

日々をしっかり振り返ることにより、自分の価値観と向き合うことになったり、「一般的には」と流されてしまうような言葉や行動の中身も、しっかり「それって本当はどういうこと？」ということでも「みえる化」することができます。

それはスタッフだけでなく、まじくるをつくる主体として全員が振り返ることを大切にしています。

自然体

人はどうしても、役割を与えられたときにその役割を全うしようとし、できるかどうか不安になるもの。その結果、自分の価値観を押しつけたり、ときにはうまくやろうと、余計なことをしてしまったりすることが多いと思います。まじくるでは、スタッフとして自分の身の丈を知ったうえで、そういう役割を演じることをあきらめ、できることもできないことも含めて、それぞれが自分らしく過ごすことを認め合うようにしています。そして「自然体で過ごすことのできる場づくり」を意識しています。

フラット

まじくるには年代、性別、経験など本当にさまざまな人がいます。それぞれが違和感なく「まじくって」しまうため、お互いに理解しようとするのが大切だと感じています。

他者に理解してもらうために、話題の中心を相手ではなく自分に置き換える。結果自分と常に向き合う。そういった意識の中で、「相手も自分も尊重」できることが、対等にフラットに過ごせるフニキづくりにつながっています。

特徴3

大活躍の就労開拓コーディネーター

研修の後半には実地研修があります。この実地研修は就労開拓コーディネーターが近郊の企業を300社以上回り、開拓した企業や関連施設・NPOとの連携により実現しています。おかげで、2年間の研修生約170名のうち半数以上が何らかの就労につながるという驚くべき結果となりました。また、そうした営業活動から企業側のニーズにもふれることとなり、中間的就労などの仕事おこしに地域全体で取り組むきっかけにもつながっています。

次に、就労開拓コーディネーターの奮闘手記を紹介します。

就労開拓コーディネーターとして

鎌田憲彦（まじくるネーム…かまG）

私が「まじくる」を知ったのは、勤めていた会社が倒産し「さて56歳。何の仕事をして残りの人生を送っていかうか」と考えてハローワークに通っていたときでした。そろそろ失業保険も切れそうだと、ハローワークのパソコンにとらめっこをしていると、見慣れない「特定非営利活動法人 地域生活支援ネットワークサロン」の文字が目にとまりました。NPOの文字は、新聞やTVなどで見聞きし



ていましたが、内容はまったくといってよいほどわかりませんでした。ボランティアじゃ生活できないしとも勘違いをし、しかも30数年間、販売を中心に営業しかやってこなかった、私にできることは限られています。

業務内容を確認すると、「就労を含めた生活支援のコーディネート」とあり、「新設」の二文字が非常に魅力的に感じました。福祉とか、人のためと考えると重くなるので、自分のしてきたこと、自分ができていることで生活していけるなら、思い切ってこの世界に飛び込みました。今考えると、逆に福祉に対して無知だったのがよかったのかもしれない。

当初は、自分の以前からの知り合いや前職でお世話になった企業を中心に、営業を行っていました。受付で「実は今回お邪魔したのは…」と切り出し、「NPOとは何？」からの説明を、本題の前に10分〜15分ぐらい行いました。私たち自身もそつたのですが、NPOに関してなかなか企業に理解してもらえませんでした。「あんたたちそれで給料もらえるのか？」とか「うちは、いくらお宅に払えばいいの？」とか散々でした。受付で門前払いされることもありました。ときには訪問した会社の専務さんに「仕事をやっていない怠け者に、我々の税金を使って救済をするとはとてもない」とお叱りを受けてなお、自分の立場をわきまえず、「まじくる」を説

明しようと企業の方とやりあったということもありました。やりあったことでその会社は、今では理解ある企業の一つとなっています。

研修生の仕事や実地研修先を探して紹介するのは勿論なのですが、それ以外に就労開拓をするうえで心がけていたことは「まじくる」の告知と周知徹底でした。就労や実地研修が難しくても、「まじくる」のことを少しでも露出ができればと考え、訪問件数を増やしていきました。「まじくる」のことを説明しても、100%「何それ？」という感じで、大変きびしかったことを今でも思い出します。そういった営業を繰り返しているうちに、段々と営業の方法や断られるのにも慣れてきて、

我々も打たれ強くなっていました。

インターンシップを行っていくにつれ、いろいろな研修生が現れるようになってきました。たとえば、事情があり未成年ながら親元から離れて暮らしている若者や、60代でヘルパーをめざしていた人。身体や精神に障がいのある人。体重100kg超の青年。何度も挫折しそうになりながら研修を6週間続けた青年。はじめはかみ合わなかった研修生同士の会話が途中からは曲がりなりにも、成り立つようになったのには驚き、感心しました。それにスタッフが入り「まじくりーまじくる」ながら、期ごとによってそれぞれ独自のカラーを出していかれていると思います。4期から5期目ぐらいにかけて、普通に仕事を探している人以外にも、精神的な問題を抱えている人とか、そのことによって生活に支障をきたし、生活保護を受給している人とか、いろいろな悩みを抱えている人が徐々に参加するようになってきました。またひきこもりが何年にもなり、働く意思や意欲をなくしてしまつて、年老いた親の年金の下に暮らしている人や、実は自分は発達障がいではないだろうかという人も増えてきました。こんなに身近に障がいがある人がたくさん居

「まじくる」の就労実績

	就職済	受講人数	就労実績率
I期	18	21	86%
II期	12	15	80%
III期	10	21	48%
IV期	11	18	61%
V期	11	20	55%
VI期	8	17	47%
VII期	3	10	30%
VIII期	6	14	43%
IX期	3	13	23%
X期	7	20	35%
合計	89	169	53%

※短期雇用も含んでいます

※受講人数には途中修了者も含んでいます

11  まじくる ●特集 生活支援戦略について考える

るといふことが本当に衝撃でした。もちろん我々は精神科の専門家でもないのに、本を片手に対応して先輩スタッフから教えてもらったことを、そのつと出しながら、不安を感じ対応してきました。もちろんその方々も、何らかの形で就労を希望されているのですが、誰もが就職が難しい状態なので、免許や資格・経験があっても思うようには就職の話は進みませんでした。今思うとまだまだ企業への営業力不足や連携が足りなかったのと、実地研修の企業に対するメリットの説明や、障がい者雇用のメリットを説明ができれば、もう少し現状を打破できたのではないかと考えます



ワークショップのひとコマ

特徴4

失業体験が活かされる職場

まじくるは1期のインターンシップ生からスタッフを採用しました。つまりスタッフ全員が失業・求職を経験しているわけです。面白いのはこれまで多くの失敗を繰り返した人だからこそ、まじくるでは活躍ができるという点。まさに当事者目線や発想が活かされるのです。これは「支援型社会的企業」の典型的な形といえ、今後の応用や拡大が期待されます。スタッフの声を紹介します。

研修生として、スタッフとして

伊藤敬洋（まじくるネーム・タカヒロさん）

当時30社近くの会社を受け、声もかからず、失意のどん底で約1年半近く失業状態にあった私は、ハローワークからの紹介もあり、平成22年5月に始まった内閣府によるインターンシップ研修（就労支援コース）およびスタッフ募集に即応募しました。20数名の方々とともに第1期研修生として過ごし、研修期間である約6週間を有意義に修了することができました。研修の初日は、お互い見ず知らずの人ばかりで、話すことすらままならず緊張感が漂っており、とにかく早く終わってほしいと思っていたことを今でも思い出します。3日間くらいで皆との距離が近づいたように

感じ、警戒心と緊張感がなくなり自然とコミュニケーションが生まれていたのを思い出します。そのきっかけとなったのがインタビュゲームでした。お互いに知らぬ者同士、両者がインタビュすることによって相手の距離感が近くなり、回を重ねるごとに自然とコミュニケーションが生まれていたのを思い出します。

私自身も聞くこと、話すこと、人前で発表することがスキルとなり、自信のついた自分があると思いました。またその他の研修には自己開示、すなわち自分自身を少しでもさらけ出して、私はこういう人間だということをみんなの前で話す。そのことにより、共感しあい、こういう人生を歩んできたと、気持ちをはだかにする自分自身を語る研修もありました。自己開示することによって警戒心が崩れ、気持ちが通じ合う。このようなことを通じ、自分の居場所や存在感を実感し、毎日研修に参加することで、目標ができ、失意のどん底から前向きに頑張ろうという自信や気持ちが生まれました。このときばかりは終わってほしくないと思いつつ、6週間の研修は修了しました。

その年7月よりスタッフとして、2期からの研修をほかのスタッフとともに任せられ、10期までインターンシップ研修を行いました。特に強く思うことがあります。それは、まだ慣



れない我々スタッフが、2期、3期の研修を進めていくなかで、何もかもがはじめての経験、体験で勉強の道のリだったときです。研修を開始して2週目あたりから3期生より研修に対しての不平、不満が生まれ、「なぜこの研修をするのか?」「なぜ90分もかけて研修をするのか?」という言葉や、連鎖反応で研修生の私語雑談など多くなり研修に対して前向きな研修意欲が薄れ低下しているのがわかりました。毎日のスタッフミーティングでは、今日1日の自分の気づきや振り返りなど話し合い、研修のプラスの要素やマイナスの要素から貴重な経験を積みかさねていったことも確かでした。研修生といっしょに話を聴くこと、そしてサポートしていく気持ちを各スタッフが自覚し、必ずその日の情報共有、振り返りをする大切さをスタッフ同士でも確認し進めました。研修生は6週間の研修に参加し、何かを得て自分の進むべき方向性を見つけることができ、進む方向性、どんな仕事に向いているか? したいのか? できるのか? 五里霧中にいる状態から抜ける糸口を探し出せたのではないかと。さらに多くの人たちと、コミュニケーションがとれるようになり、1人ではないという自分の存在、立場が認められている、居場所がある、そのことによって本来自分のもっている、自分の本当の姿を再び出すとう安堵感が生まれ自信もついたのでないかと思えます。

就活サポートの面では、仕事の相談から、面接模擬練習、履歴書づくり、職務経歴書作成など体験していただきました。就職に向けての準備、そして就職活動をするための知識が備わっているかどうか? 再確認してもらい、再び自分自身に就活意欲と自信をつけることにつながるように意識していました。

最後に、私の「まじくる」を振り返ってみると、1期生から10期生まで年齢に関係なく数多くの研修生が精神面での自信や生きていくうえで目的を見つけ、方向性は異なりましたが修了していきました。多くの研修生の方々と関わり、「まじくる」に来てどうだった? の質問に、皆が声をそろえて、「自分の居場所があった」「安心できた」「いろいろな出会いがあった」、そして「自信がついた」と言いました。

私も1期生のとき、皆さんと同じことを言ったのを覚えています。スタッフにとっても、研修生の存在が大きかったこと、完璧ではないが自分らしい研修をしてきたこと、そして「まじくる」に来てくれたすべての人たちと同じ目線で関わり、研修を通してスタッフとして成長させられた2年間でした。

特徴5

出口づくりの模索〜中間的就労へ

以前からまじくるでは、研修終了後の「出口」が少ないことが課題となっていました。これは、釧路地域の不況によるところが大きいです。別の要素として、「働く」ということの柔軟性のなさ。裏を返せば、働き方に対する多様なニーズが、無視できないほどに関係しているという実感もありました。1日数百人にもものぼる人たちがハローワークに集まる一方で、担い手が足りないという産業からの声が聞こえてくることとその証拠だろうと思います。そのような多様な働き方へのニーズの現れなのか、出口の1つの形として「内職仕事」へのニーズが多くあることは、日々の研修生の話からもつかんでいました。



● 出口づくりの魚網づくり

スタッフの知人から、近隣町村の製網会社で漁網づくりの担い手が不足しているという相談を受けました。

「これは面白いんじゃないか？」ということで、まじくるに製網会社の社長さんを招いて、漁網づくりの講習会を開いたところ、10名以上が集まって、そのなかから4名が、実際に仕事として働くことになりました。現在漁網をつくっている4名が、集まってワイワイやりながら作業しているようです。



みんなでワイワイ漁網づくり

そういう意味では、就労のニーズとひとで言っても、人それぞれに求めているものは違うんだなあということと、「働く場＝集い場」であり、その集い場の雰囲気づくりは大切なんだということを実感します。

漁網づくりの担い手はどこの会社も不足しているということで、まじくるでの漁網づくりは、思った以上に期待されていることがわかりました。これは、地域の産業が、あまり知られていない、つまり、「この地域にはどんな仕事があるか」がしっかりと伝わっていないんだということを教えられる結果でもありました。

地域のニーズとまじくるに集まる人たちのニーズをつなぎ、双方にとって活かされる場となったことは、今後のまじくるを考えるうえで、非常に大きな意味があるように感じています。

特徴6

起業という働き方

地域起業創造センターという名称は釧路公立大学の前の学長である小磯修二さんがオープンに際して「地域ならではの新しい『起業』をみんなで創っていきましょう」という期待を込めて付けてくれたものです。地域経済の低迷により既存の雇用枠は限られ、何らかの生きづらさを抱えるような場合には、一般就労が非常に高い目標となるのが実態です。そんななかで、それぞれに合った働き方を見つけて、創っていく動きも始めています。一般就労をめざし、まじくると関わりを続けるなかで、自分らしい起業をした若者の声を紹介します。

マッサージで自宅で開業

高橋護渉（まじくるネーム…モリー）

私がまじくるの研修を受けたきっかけは、ハローワークで求人票を見たことです。研修が始まってからの三週間は、話すことなどコミュニケーションづくりが中心だったように思います。私は自分から話をするのが苦手な人見知りだと感じていたので、年齢も職業も違う人たちと関わることは大変でした。後半の3週間は実地研修が中心で、自分は福祉関係の施設などに行き、研修を通して支援を





面接練習・異世代交流

することの難しさを感じましたが、研修終了後は福祉関連の職につきたいと考えていました。

1期6週間の研修終了後、スタッフに「まだまた人とのコミュニケーション自信がありません」と相談したところ、2期も研修に参加してみてもどうかと勧められました。スタッフに今後についての相談をしたところ、マッサージの仕事の経験を活かし、自分のペースで仕事ができるということが自分に向いているということもあって、マッサージの営業をまじくるの片隅で試してみてもどうかとアドバイスをもらい、実際に行ってみました。責任をもって仕事をするにすごく難しさはありましたが、相談をしながら仕事ができるため、精神的に安定しながら仕事ができるこ

と、責任感を感じるため集中力が少しついたこと、また、自分の仕事で感謝される喜び、自分が働くことができる喜びを感じることができました。

一方で、経験はあるけれども、資格がないための将来性への不安や、本当に自分の施術が正しいのか、また不安定な収入など、実際に取り組んでみなければわからない要素も浮き彫りになってきました。

その後、安定した収入を得たいと考え数社に履歴書を出し、面接をしましたが見つ方には結びつきませんでした。そんなところ知り合いからマッサージの依頼とお客様の紹介があり、まじくるでの経験を活かし今度は自宅開業という形で挑戦することを決意しました。

現在、自宅開業して約一年になります。自宅なので自分のペースでできることがなによりです。そのほかにも自宅開業は正解だったと思うことがあります。それはお客様との1対1の人間関係がゆつくりとしたペースで築けるため、自分に向いているとも考えられるからです。現実にはまだまだ課題もたくさんあり、難しいと感じる場面も多々ありますが頑張っ

て毎日仕事に励んでいます。将来的には規模を拡大して人を採用できるようになればいいなと思います。また、仕事以外にも海外ボランティアに参加して、発展途上で働いてみたいと思っています。

事業終了後のまじくるとして

平成24年3月に地域社会雇用創造事業が終了し、まじくるは自主事業で継続しています。現在ではインターンシップのような研修期間はありませんが、その時々に合わせて研修などの活動を行っています。4月からの4か月あまりでハローワークからの紹介でまじくるを訪れた人は何と約50名。パソコンの利用や就労相談、生活相談などそれぞれのペースで活用しています。あらためて、就職活動で往復するハローワークと家の間に、社会の中で自分の存在や所属が感じられる居場所や人のつながりや出番が必要であることを痛感します。

さらに昨年から徐々に始まっている、若者自ら行う就活スタイル「まじくるカフェ」が教育現場とつながりはじめ、学校からつながった若者がまじくるに集う日もそう遠くはないように思います。

11月からは無料職業紹介事業もスタートし、パーソナルサポートサービスや地域の各種就労支援機関との連携をさらに深めることで、求職者一人ひとりのニーズに合わせた地域に求められる新たな就労支援の役割を探し、担っていききたいと思っています。



特集③

RealTalk

きびしい状況の家庭で育った、
若者たちのリアルトーク
自立していくために大切なこと

今回の「生活支援戦略」でも大きな課題としてあげられているのが「貧困の連鎖」です。たまたま家庭の中に失業、事故、病気、障害などのアクシデントが起こり、生活や人生がきびしい状況に陥ってしまう環境下で、育ち、生きていくことは想像以上にいろいろな影響を受けます。そうしたハンディを個人の努力の問題にするのはあまりに過酷です。一日でも早い支援策の整備が求められます。

きびしい状況の家庭で育ち、そこから物理的に離れて、今は釧路市で生活支援を含む個別支援、就労支援などトータルなサポートを受けながら自立をめざす10代、20代の若者たちに、その経験から感じてきたことを話してもらい、その声を拾い集めてみました。

Aの言葉

家では、ずうーっと
気を遣っていました

「家は、もともといい暮らしではなかった。離婚した父親の母親に

対する暴力とか：虐待とか。お金の面も大変だった。高校進学のと

きに行きたい学校があつて合格したけど、入学金や授業料が高くて

あきらめた。家では、しょっちゅう言い争いとかケンカをしていたし：自分の中ではトラウマみたいな

な感じになっている。父親ってこんなものなのかなあつて思った」

「家では、ずうー

っと気を遣っていました

した（きっぱり）」

「（一歩踏み出すこ



とへの強い躊躇を問われ）はい、

悩みます。やる前になんかかんか

考えちゃうんですね。心配をた

くさんしちゃう」

「病気のお母さんの代わりに家

事をしたり、面倒をみたりする生

活だった。それが当たり前になっ

ていたけど、やっぱり大変。つら

いことがいっぱいあった」

Aの家庭背景

DV、虐待

離婚・生活苦

母の精神疾患

生活がまわらなくなる

母親のケア、家事などの

負担（びくびくして、ずっ

と気を遣う日々）

家ってさ、一般的には「安

心して帰ることができる場所」っ

てイメージがあるよね。でも、そ

の家が、ずうーっと気を遣ってい

たり、びくびくしたりする場所になるっ

てことは：そう想像すると、そんな人た

ちが自立するのってきつと時間がかかると



あゝ、俺が悪いんだなあ

「自分は、小さい頃から母親が

うつだったのが大きいかな。その後、父親の会社がダメになって転職することになった。それがタクシー運転手で生活が安定しないことで、母親のうつが悪化した。その頃、突然、離婚の話が出てきた。理由を聞いたら、借金の問題だった。離婚をして、生活保護の手続きをした頃には母親の状態は悪化して、毎日自分の生活だけで精いっぱいになっていた」

「自分は中学生だったけど、部活もあつたなかで、さらに家事をやることになったりして：家庭内がうまくまわらなくなっちゃった。洗濯物もたまっちゃうし、洗い物もすごいし、掃除も全然でき

てないし」

「母親にそれを指摘したら、母親は自分にあたり始めた。『あんたが、ちゃんとしなから、洗濯物がたまる。洗い物もこんなになっちゃう』って言われると、そのときは『あゝ、俺が悪いんだなあ』と思っていた。でも、高校生ぐらいで『あれ？これっておかしいんじゃない？』と気づいた。母親に訴えたけど、『私は病気なんだから』と言われた。財布を握っているのが母親だから、何か言うと飯抜きとか服も買ってもらえなかったりした。でも、小学生の弟に同じ思いをさせたくないから、家事も頑張つてやっていたら、朝起きれなくなつて：病院に行ったら『うつです』って言われた。うつになったら、母親は急に優しくなったけど。でも、それまでがあるから『あまりにも理不尽すぎるだろ』と思っていた」



「ばあちゃんが心配して手伝おうとしていたけど、お母さんが毛嫌いして：だめだった」

「周囲に言っても『お母さんは病気なんだから仕方ないよ』って言われるから、『俺が悪いのか。病気の母さんを疑っている俺が悪いんだ』と思っていました」

「借金の問題があつて、父親のところで暮らすことができなかった。月1回だけ父さんの家に行くことになって、一度、あまりつらいから『このまま父さんの家に住みたい』って言ったけど『金がないから無理だ』って言われた」

「まずは親から離れて、こっちに來れたから頑張れる。あと、家だと趣味とか自分の好きなこととか我慢したり、制限されていたけど、こっちに來てからそれを気にしなくてよくなったから、自分の目標ができたっていうのか、可能性が広がった感じ」



みんな全然悪くないのに、「自分が悪いんだ」「自分がちゃんとしていけば」って自分を責めてるよね。それに、明らかに大変な状況なのに「困った」「おかしい」「誰か助けて」「助けてもらってもいい」と思えないでいるんだ。自分には魅力も能力もある、社会に貢献できる存在になるっていうイメージがなかなかできないんだよね。

Bの家庭背景

- 父母の不仲
- 母のうつ病
- 父親の失業・転職
- 経済苦
- 借金
- 離婚
- 母の病状悪化
- 生活がまわらなくなる
- 自分もうつ病
- 定時制高校卒業も就職できず



刹那的な 状況に慣れた

「火事になるまではそんなに大変だと思わなかったけど、火事になって、母親が亡くなり、父親の仕事もうまくいかなかった。お金のやりくりがどうも大変だったらしい。」

食べ物がいなくなっていった。冷蔵庫からものがなくなっていた。中学生ぐらいからかな。ガスも止まったり、『ガスは止まるもんだ』と思っていた。冷蔵庫は「光る箱」でしたね」

「学校で持ってきてくださいって物はだいたい用意できない。

セロハンテープ、コンパス、定規とか…100円で買える文房具だけじゃないから持って行けない。家族に言っても『わかった』って言うだけで用意はされない」

「刹那的に生きてきたから、先のことを考えられない。刹那的な状態に慣れた」

「新しいことはとりあえずやってみるところまでで、その先が続

かない。あきちゃう感じで、頑張ることがなかなかできない」

C・Dの家庭背景

● 自宅の火事

● 母の死亡

● 家庭内がだんだん回らなくなる

● 父の仕事が減っていく

● 収入が格段に減る（父親がほとんど帰って来なくなる）

● 家に食べるものがなくなる

● ライフラインも止まる

● 家を追い出される

● 狭いアパートで常に生活苦

● Cは学費が払えず高校中退、Dは小学校高学年から不登校（どこにも行けず、誰にも助けてくれる人もおらず、極貧状態の中で生きのびるしかない状態）



長い間、きびしい生活をしていると「やる気」とか「頑張ること」そのものの感覚が薄れていくんだね。誰でも、条件が整えばすぐに頑張ることができるわけじゃないってことだよ。彼らは困窮状態の家から脱して数か月後に話を聞いたなら、「先のことを考えてもつらくなるから、できるだけ考えないようにした」って言うてたなあ。二人は寒い北海道でひと冬暖房なしで暮らしていたこともあるんだ。



変化に対する 恐怖心があります

「親父が逮捕されたときは、『あ

ー、この家終わった』と思いまし
た。この先どう生きていけばいい
のかなあって。大黒柱がなくなっ
た感じ。『当時は中学生だったか
ら、受け入れるしかなかった。そ
れが現実だから、『困った』って
感じはなかった。でも、親父のこ
とがなかったら、もっと選択肢は
あったと思う』

「あとは、父さんの起こしたこ
との事後処理が『何で、こんなこ
とやらなきゃなんないの?』って
思った。勝手に母さんの名前でカ
ードつくって借金したから、それ
を払わなくちゃならなかったし。
銀行の人と交渉しても『あなたの
名前の借金だから、払わなくちゃ
ならない』と言われたのに、弁護
士さんに手伝ってもらったら銀行
が態度を変えて『これが、権力か』
って思った。生活保護も申請に行
ってもダメだったのに、某新興宗

教に頼ったら、鶴の一声で降りて
：『これが力か』と思った」

「支援を受けるのにも差別を感
じた。支援のシステムの存在もま
ったく知らなかった。
銀行の人との交渉も母さんじゃ
だめだってことになって、自分が
代わりにかけてみたけど、『何だ、
このガキ』って感じで、無茶苦茶
な論理はまったく通じなかった
(笑)。理不尽さを味わった」

「小さい頃から暴力(父から母
への)があった。そのことが結
構、今の自分には影響していると
思う。争いが嫌いとか…あー、当
時は、びくびくしてましたね」
「(一歩進むことへのためらいを

問われ)…あると思います。絶対、
失敗できないみたいなのはありま
す。いったん失敗したら、家庭の
基盤がめちゃくちゃ弱いから、そ
の失敗が大きな事故につながりか
ねないから。変化に対する恐怖心
があります」

「もし、一歩動いたとしても、『わ
ー、やっぱりダメだった』って感
じ。何かやろうとしても、家のこ
とを考えると無理なことがたくさ
んある。もし、感情や思いだけで
動いたとしても、家にはきびしさ
があるから、現実が浮き彫りにな
ってつらくなる感じ」

「基金訓練は朝起きてちゃんと
行っただけは、まずは行かないと
10万円がもらえないから(笑)。
それと、こっちにきてようやく『何
とかなりそう』って展望がもてた
こと」



不安定で弱い生活基盤は
一歩踏み出すことへの恐怖心
を大きくするんだね。挑戦するっ
てことがとても難しくなるん
だろっね。「何とかなりそう」っ
ていうのは、挑戦しても、失敗し
ても大丈夫って実感をもてるよう
になることなのかもしれないね。



Eの家庭背景

- DV・父親の
ギャンブル依存
- 父親の借金(2回)
- 会社のお金を横領
- 逮捕
- 家庭崩壊
- 生活保護
- 高校中退(家庭は大もめ)
- 定時制再入学
- 引きこもり



もともと、お父さんに 経済観念はなかった

「中学のときにお父さんが燃え尽き症候群になって、仕事に行ったり行かなかったりになった。自分も学校に行きたくなくなり『お父さんも行かないなら私も行かない』って不登校になった。お母さんが必死になって何とかしようとしていたら、お母さんが倒れた。そんななか、自分も精神科に通う状態になった」

「小さい頃から塾に行って、私立の学校に進学しようとしていたけど、それも無理になって、お父さんを恨み始めた。お父さんが働けなくなっただけは病気の保険金で暮らしていたけど、それが尽きてきて生活費が回らなくなってきた、ばあちゃんから生活保護の話が出た」

「お父さんは生活費が回らない状態なのに、保険金は自分のお金だって言っていて、趣味に使ってしまう状態だった。高校時代



に修学旅行に行かなかったからそのお金が残っていたのを、お父さんが最初は『自分のために使った』いい』と言っていたのに、知らない間にお父さんが使っていたりした」

「もともと、お父さんに経済観念はなかった。でも、働けているときはそれでも収入があつて回っていたし、お母さんが必死にやりくりしていたけど、お父さんは仕事に行けなくなるし、お母さんは倒れるし…それで、回らなくなっ

た」
「お父さんに経済観念が身についていたら違ったと思う。離婚して、お父さんの所へ行くことになつたら、それまではお母さんが

財布握っていたのが、お父さんが握ることになって、それはひどいことになった。お小遣いが1か月5千円だったけど、通学の費用とか学食でのお昼とか、家の買い物もそこから出すことになるから、実質お小遣いじゃなかった」

「未来の目標があると頑張れるって言うけど、私は先を考えると学校卒業して就職して『親の面倒をみなくちゃならない』って目標があるから頑張らなくちゃと思うのかもしれない。もし、他の人が親の面倒をみてくれたとしても罪悪感が消えないから…親が死んじやったときによく自分の目標をもてるようになるのかも」

Fの家庭背景

- 父の借金
- 父のうつ病
- 父の失業・転職
- 収入減
- やりくり困難
- 母の精神疾患
- 自分の精神疾患
- 入退院や高校休学・復学の繰り返し

想像以上に「お金」が家庭にとって重要な存在なんだね。収入が不安定になる、借金でトラブルを起こすなど「お金のやりくり」っていうこともなかなか大事なことでみただね。それに、精神疾患も背後にずいぶんある。さらに背後には発達障

がいの問題が潜んでいることも多い。

そうしたリスクをたまたまもっていたとかアクシデントにたまたま見舞われただけで、容易に窮地に陥ってしまつ社会なんだね。だからこそ、受けとめるセーフティネットがとても重要になるよね。



親が亡くなる、病気、離婚などそれまで家庭でいろいろな役割を果たしていた人が欠けてしまうことは大きな影響を及ぼすんだね。だからこそ、家庭のサポートが必要になるんだけど、親が拒否をしたらサポートは入れない。実際に嫌がる人は多いんだよね。というよりも、そうした親たちもとっても追い詰められていて、責めずに同じ目線で一緒に考えてくれるようなサポーターが必要なんだけど、そういうサポートが実際にはなかなかないんだよ。



おわりに

今回の若者たちは全員、所属していた学校の先生たちによって支援につながっています。家庭や生活、人生を本気で心配し、ねばり強く関わり、必要な支援につなげてくれた先生がいたことで、たまたま今の支援を受けることができたのです。改めて学校の存在が大きいと思います。

みんなとの話から、若者たちが自立していくために必要なこととして、

「危機的な状態（家庭）から脱すること」「好きなことがある

こと・取り組めること」「将来の展望が見えること」「サポートがあること」などの意見が出ました。

今、NPO法人の調査研究事業で支援のあり方について一緒に研究しているCは、1年半ほど前には札幌で希望をもてずに閉塞感の中で引きこもっていました。そこから、今にいたる自身のこれまでのプロセスを振り返ったときに、次のようなポイントを3つに整理しています。

- ①課題要因（家庭）から物理的に離れること
- ②安定した生活基盤があること
- ③社会との接点があること

特に③については「自立などのあるべき姿を一方的に与えられたり、すでに決まっているのではなく、自分で決められて、自分モード（イージーモード、ノーマルモードなど）でいけることが大事だ」と説明しています。

私はみんなと話していて、その説得力のある言葉やそれぞれの生きた表現、もっともな意見がたくさんあることにいつも惹きつけられます。借りてきた言葉ではなく、自分自身が感じてきたこと、思ってきたことを表現するからこそその力だと思えます。

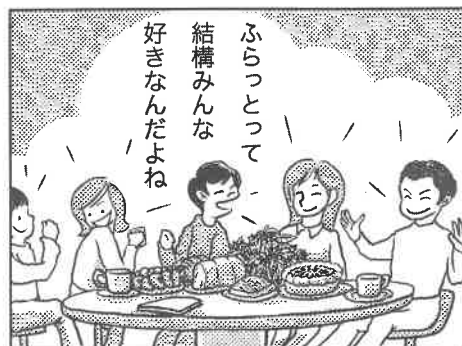
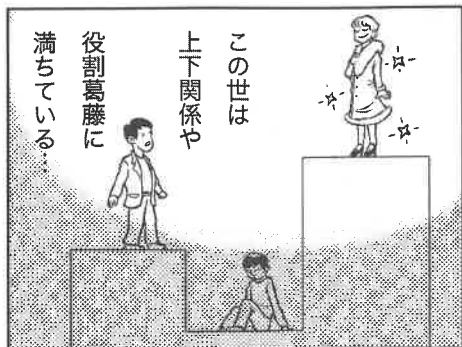
だからこそ、こうした若者たちが社会とつながり、自分たちの声や行動が社会を担っていく、新しい姿に変えていくことができる機会を一緒に創りたいと思っています。（ひお）





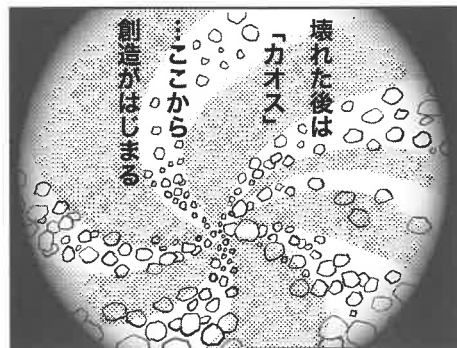
まじくるんが行く

まじくるんの必殺技2「ふらっと」



既成概念の中でもとりわけ影響力があるものの一つが「社会的役割・地位」ってやつだ。大人として、男として、女として、課長として、母親として...それぞれがもつ社会的な役割や地位によって本音を言えず、自分の意思や気持ちよりも立場を大事にしようことがある。また、周囲も暗黙に立場や役割のふるまいを要求したり、期待したり、評価をしたりする。それは想像を阻むだけではなく実は誰にとっても苦しかったりするんだ。だから、きっかけや仕掛けで「ふらっと」にすること、これはとても大事だよ。

まじくるんの必殺技1「がいねんこわし」



私たちは知らず知らずのうちに「常識」「当たり前」「普通」という既成概念にいつも縛られている。既成概念は悪意も意志もなくとも、巨大な幻想となって人々を追い詰めたり、弱い者の力を奪ったりすることがあるんだ。これからは幻想から逃れて自由に議論や実践ができる空間・機会がとても大切。そのために、まじくるんは既成概念を壊し続ける。あなたも、壊すまでは難しくても、常識や当たり前を疑ってみて、「必要なことは何か」「大切なことは何か」と考えてみませんか？



まじくるん の基礎講座

「当事者が 活躍できる」

支援体制をつくろう！

生活支援戦略が示すように、今、さまざまな事情で生活に困っている人たちを地域で支える新しい制度や体制がつくられようとしている。でも、その内容やプロセスにちょっと不安があるんだ。それは、応援されようとしているいわゆる「生活困窮者」と呼ばれる人たちが体制づくりや支援のプロセスにあまり登場しないこと。

生活困窮者は「社会の支える仕組み（セーフティネット）からこぼれ落ちた人たち」ともいわれているように、さまざまな機会から排除されて活躍することがなかなかできなかった人たち。だから、そういった人たちがちゃんと活躍できるような社会の仕組みを考えなくちゃならない。

そんな思いから釧路市では厚生労働省の社会福祉推進事業の補助金を受けて生活困窮者の「当事者参画型自立促進体制」構築事業っていう取り組みをしているんだ。まだ、調査・研究は途中だけど、その途中経過を紹介するね。



「支援」「自立」を整理してみる

今回の調査研究事業の大きなテーマの一つが「そもそも支援って何だろう？」「自立って何だろう？」ということ。いつも、当たり前に使っているけどその整理が必要だと思っている。その原点にあるのが「支援を受ける人たちの立場」「自立をめざす人たちの目線」。これまでのいろいろな分野で支援を受けながら、自立をめざす人たちに会って話を聞いてきた。また、いろいろな分野で支援をする側の人たちにも会って話を聞いてきた。そうしたなかで気づいたことは支援を受

ける側と支援をする側のちよつとしたミスマッチや温度差みたいなものがあること。違う立場の人間同士だから見方や考え方に違いやズレがあるのは当たり前だけど、支援する側とされる側のズレは支援というプロセスにおいてはけっこう厄介なんだ。なぜなら、支援される側と支援する側にはそれぞれの社会的立場や役割意識があつて、対等になることがとても難しいから。でも、両者にズレがあるとして、よくあるのは支援する側がどうしても立場が強いから、ズレのすり合わせがうまくいかないときに、支援する側の

意向で物事が進んで行ってしまうことだ。

困っている人たちが自立をするプロセスの主人公は、間違いなく支援を受ける側だ。だから、こう考えている。「自立のプロセスにおいては、当事者自らが自立への意欲をもち、自らを助ける意志をもつことが不可欠であり、その基盤がなければいかなる支援も効果が望めない」と。つまりは、支援を受ける側が受け身ではなく、主体的に、意欲的に、自分を助けようという気持ちになれるかどうかがとても重要で、そのためには自立をめざす人たちが積極的に「支援体制」に参



画する仕組みが必要だと考えている。

でも長い間、支援は専門家である支援者主導だった歴史がある。医療がその代表例だね。個人を患者として治療の対象者にとらえ、悪いところをお医者さんなどの医療従事者がプロとして治してくれるという発想、うまくいかない原因はその人の病気や障がい、状況などにあり、その個人的な原因をなくす、乗り越える発想だ。それは「医学モデル」とも言われている。でも、最近はそういう発想ではなく、うまくいかない原因はその人と社会との間にあって、その人を一人の生



活者としてとらえて、その人を中心とした支援チームをつくって社会とうまくやっていくための応援をしていく発想が自立につながるという考え方に変わってきた。これが「社会モデル」というものだね。でも、実際に支援の現場では長い間、医学モデルが一般的だったから、なかなか社会モデルは根づいていない。その背景には、今までの福祉制度の仕組みにも原因がありそうだと考えている。新しい支援制度が今までのいろいろな支援制度の反省も含めて「人を支える」ことをみんなが考えて、担っていくための大きな転機になりうる。だから、いろいろな分野で支援をしてきた人たちが支援を受けてきた人たちに話を聞き、釧路で取り組んでいた実践から学んだこともふまえて検証している途中なんだ。

自立って何だろう?

自立にはいろいろな考え方がある。最近の例ではだいたい3つに分けられることが多い。一つは「経済的自立」。これは、自分の生活費を自分で稼ぐことにある。イメージがしやすいね。次に「日常生活自立」。これは、朝起きて、ご飯を食べたり、お風呂に入ったり、日常の

生活を自分の力で営むことにあたる。次に、「社会生活自立」。これは、仲間がいたり、居場所があったり、誰かの役に立ったり、社会の中で自分が安心して自分らしくいられることにあたる。

この3つがそれぞれの持ち合わせた能力や状況に応じて達成できれば自立だという人もいる。でも、そうじゃないという人たちもいる。それは、重度の身体障がいをもつ人たちだ。重度の身体障がいがある人たちは、どう頑張ってもお金を得るための仕事につけなかったり、日常生活に介助が必要だったりする場合もある。そうすると「自立はできないのか?」。答えは「ノー」だ。重度の身体障がいの方たちが自立生活支援をしている団体を訪ねたときにはこう言っていた。「自立は、自己選択であり、自己決定である」。自立は自分のことを人の力を借りずに自分の力でやり遂げることでない。でも、できることは自分でやるのは基本だ。だから、こう整理してみた。

自立とは「必要な支援を受けながら、自己選択、自己決定をし、自分の潜在能力を知り、社会に活用し、社会の一員として貢献すること」をいう

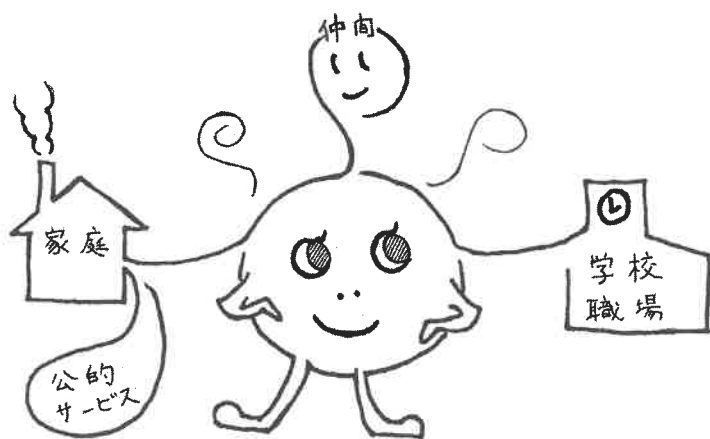


そうすると、自立できない人はいなくなる。それは同時に、楽をして自分勝手に暮らすことでもないこともわかる。自立は権利であり、責任もあるってことになる。

「自己」「自分」を広くとらえる

さっきのように「自立」を考えるときにもう一つ、整理をしなければならなかったことがある。それは「自分は自分の存在だけを示すわけじゃない」ってこと。普通、「自分」というと身長が何センチで体重が何キロで、どんな顔をしていて、学歴がどうで、何ができてできないという自分自身が備えた資質の総合だととらえられている。でも、社会の中で生きていくことを考えると、自分が備えている資質だけを考えてもあまり意味がない。だって、誰もが自分が備えた資質だけで生活しているわけではないからだ。家族がいれば、家庭内で何らかの助け合いがあるし、仲間がいれば力になってくれることがある。また、学校や職場などの所属があればその支えがあるかもしれないし、逆にそうしたつながりがあっても関係が悪ければ自分の力がそがれることもある。それから、社会の中にあるいろ

いろなサービスも利用する。市場から物やサービスを買ったり、公的サービスを活用したりもする。つまりは、自分は自分自身が備えた資質と自分がつながった活用したりできる物や人や組織や環境などとの関係性の合計みたいなものだ。そうそう、もう一つ、自分の資質を使いこなすスキルも必要だね。このスキルも実は人とのつながりの中で身につく。



自己くん

だから「自立」は人とのつながりにとっても左右される。自分は何ができるのかではなく、自分がどんな人とどれだけのようにつながり、スキルを学び、身につけることができるのかがとても重要になるんだ。でも、人とのつながりは黙っていてもできない。人と出会い、関わり、活動をするような機会によってつくられる。それを「社会活動」と名づけることにする。また、社会活動によって自分がどんどん育って行くことを「自己の成長」と名づけることにする。

自立のための土台「自己の成長」

社会活動の機会がないと人と出会うことができない。人と出会えないことは、つながりが増えないだけじゃなくて、つながる練習もできないことになる。つまりは「自己の成長」が難しくなる。今の生活困窮を考えると、これがけっこう厄介で重要なポイントだと思っている。

人が生まれて最初に関わる人は家族だ。今は、家族の人数がとても限られているし、支え合う力が弱くなっているのだから、家庭だけではなかなか「自己の成長」のための練習をすることができない。また、地域の活動やつき合いも減っている



から地域でも社会活動の機会がとても少ない。そうになると、子ども時代に誰もが所属する学校が「自己の成長」の貴重な機会となる。でも、学校は多様な人たちに出会えないという弱点がある。出会う人の種類が立場によって二種類しかない。「先生」と「同年代の友だち」だ。しかも、先生は勉強を教えてくれる人で「言うことを聞きなさい」と言われるし、友だちとは仲よくしなければならぬと言われる。誰とどうつながるのか、練習をしたり、試行錯誤したりするには選択肢が限られるし、望ましい関係性を最初から期待される。そうすると自分に合った人とのつながりをつくることは現実的にはとても限られる話だ。

家庭、地域、社会のさまざまな変化によって、社会活動の機会が減り、質が固定化してきたことで、どんな人たちにとっても人とのつながりを確保することは、難しい世の中になってきた。つまりは、誰もが「自己の成長」が困難な時代になったといってもいい。そんななかでもとりわけ不利になる人たちがいる。たとえば、社会活動の基本・基盤となる家庭がたまたまきびしい環境にある人たちだ。これは、16ページからの「若者たちのリアルトーク」の若者たちが実態を教えて

くれる。親が病気を抱えていたり、経済苦によって家庭が崩壊していたりしたら、自己の成長のための社会活動が家庭の中ではほぼ期待できない。期待できないどころか自分の資質や力まで奪われることになるし、人とのつながりための練習もろくにできない。また、家庭そのものが社会とのつながりをもてなくなると孤立すると、ますますその家庭に所属する人たちが外部とのつながりをもつことにハンディを背負う。弱い家庭が社会に排除され、さらにはその弱い家庭の中でもっとも弱い者が家庭内で排除される。家庭そのものが「自己の成長」がうまくいかなかったままに孤立してしまっている。

それから、人とのつながりをつくるのがもともと難しいタイプの人たちもとて苦勞する。特に発達障がいの人たちは苦勞なことが見えにくいし、わかりにくいから「自己の成長」の機会を適切に得られない場合が多い。もちろん、発達障がいだけじゃなく、それ以外のさまざまな障がいは、人とのつながりを制限する要因になってしまう。

諸々の事情で「自己の成長」がうまくいかないと非常にいろいろな状態の家庭や個人ができあがる。そうするとアクセシビ

トに見舞われたときに立ち直ることができないし、踏んばりがきかない。そもそも、ちょっとしたことで崩れてしまう。崩れて、困った状態になったときに「支援の必要な人たち」として登場することになる。仕事になかなかつけない、引きこもってしまった、非行や事件を起こしてしまった、借金を繰り返してしまったり、人とうまく関われない……などいろいろな形の困りごとや状態像で支援の場に登場する。

でも、その困りごとや状態像は実は表面的な結果の一部にすぎない。そこにだけ注目することが「自立」をめざすプロセスにとって、実は障壁になっているのではないかと踏んでいる。だから、生活困窮者をちよつと見方を変えて次のように整理し直してみた。

生活困窮者とは「適切な社会活動の機会の欠如により、自己選択、自己決定が困難および自己理解と能力発揮、社会貢献が不全な状況に陥っている者」をいう

生活に困っている人だけど、それはその人のせいではなく、その人に合った社会活動の機会を得ることができなくて、人とのつながりがもてずに「自己の成



「長」が阻害され、結果として自分の力を社会に貢献できなくなってしまうという人という具合にとらえてみることにしたんだ。

つながりづくり 回復 学習 社会変革の運動

これまでの支援の仕組みは、生活困窮者がその困りごとの状態や種類によっていろいろな既存の支援の場に登場していた。つまり、それは表面に目立つ困りごとに着目されて、その課題を取り除いたり、克服したりする方向性に支援が進められてしまいがちだった。

でも、これまで説明したとおり、本当は「社会経験の欠如」により「自己の成長」がうまくいかなかったことが背景にあるのだから、そこに注目して土台を強くしなければ自立ができない。

じゃあ、土台はどうしたら強くできるのか？「自己の成長」を応援できるのか？そして、社会に貢献することができるのか？それは、安心、安全に他者と関わりをもち、関係性を積むことだ。それ以前に、もし危機的な状態にさらされ続けていたり、誤った経験をし過ぎていたりしていたら、回復や学習のし直しも重要だ。でも、それらもすべては「人

と関わる経験」、つまりは「社会活動」によって可能となる。さらには、社会や地域の側がそうした人たちも受け入れる、貢献できるような機会を創造することだ。社会そのものが変わることも重要だ。それらがうまくかみ合わない、人は生活困窮者の自立の促進はできない。

生活困窮の背景にはその人の「社会活動の欠如」と「自己の成長」への妨げがある。だから、表面的な問題だけを結果として見るのではなく、背景に迫り、自己の成長を促し、社会を変えないと自立を促進することはできない。でも、これまでの支援体制は課題別に分野があり、専門家がいて、必要なサポートをして、課題の克服をめざすようなやり方が主流だった。それでは限界がある。何よりも自立をめざす人たちが要支援者として対象化されてしまつては、自立をめざす主人公にはなりにくい。自立をめざすのは本人だ。

必要なサポートを受けることも重要だけど、それ以前に自分を知り、選び、決め、能力を発揮する土台ができていないといけない。つまりは必要なサポートを受けるための準備が同時に必要だということだ。そのためには、本人が生きいきと自分らしく自己を成長させるような土台づ

くりの仕組みが必要だし、その仕組みには当事者の役割が大きいと思うんだ。

当事者活動への訪問

必要なサポートを受けるための土台づくりのヒントになると考えたのが、セルフヘルプグループなどのピアサポート活動だ。いろいろな分野でお互いに支え合うための取り組みをしていて、その効果を上げている。でも、一方ではこれまでの支援と同じように状態像や困りごとの種類ごとになっている。たぶん、同じ立場同士で理解をし合えるようなメリットがあるのだけれど、横のつながりがないのはちよつともつたいたいと思ったんだ。それから、ピア同士の支援には限界があることも小耳にはさんだ。

だから、いろいろなピアサポートの現場を訪ねて、当事者同士が支え合うことの意義やいいところ、逆に限界やデメリットを聞いてくることにした。同時に、分野を超えた「当事者」というつながりや支援への参画の仕方ができないかどうか議論している。これまで、キャンプル依存、母子家庭、セクシユアルマイノリティ、社会的養護経験者、重度の身体障がい者などのピアサポートの活動をし



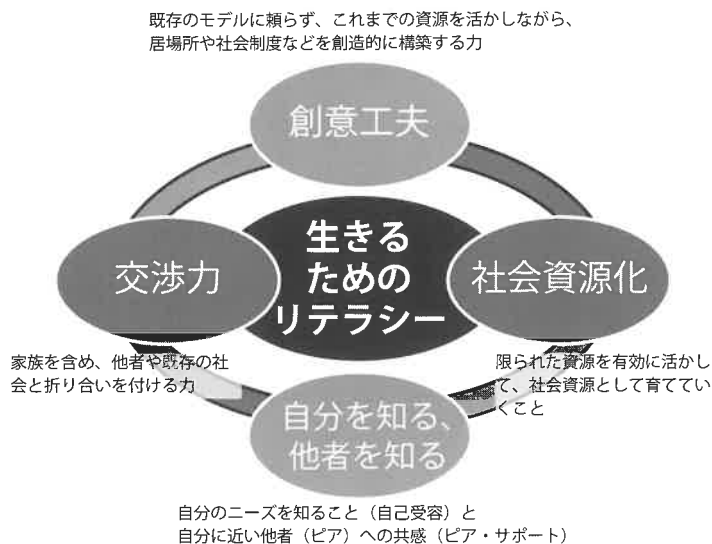
ている人たちに会ったり、活動現場に向いたりした。

やっぱり、同じ悩みをもつ者同士の支え合いは直接的な支援を提供している場合もあるけれど、基本は人とのつながりをつくったり、自分の話をしたり、これまでと一緒に振り返ったり、「自己の成長」のための「社会活動」だということがわかってきた。そうした活動を中心で行っている人たちからの聞き取りでは、表現は違っていても、自立のための土台をつくる「社会活動」の要素を強く意識していることがわかってきた。

それは、従来の〇〇サービスといったような、できないことを補うようなものではなく、悩みや困りごとをもった人が「自己の成長」することによって、自身が自分をうまく助けたり、人とつながったり、頼ったり、社会資源を使いこなす力をつけていくようなあと押しするものだった。セクシュアルマイノリティのピア活動の代表の方は「生きるためのリテラシー」と名づけて図1を使って説明している。

また、重度の身体障がいの方たちのピアサポートでは自立するには「自立生活プログラム」と「ピアカウンセリング」の両輪だと聞いた。自立生活プログラム

図1 生きるためのリテラシー



は具体的な日々の生活での実際のサポートを個別に組み立てて実施するものであり、ピアカウンセリングは自己選択や決定ができるためのエンパワメントをする機会だ。いくら実際のサポートがあっても、「自己の成長」がなされていないと、適切に使うことができない。それは生きるためのリテラシーが育っていないとも言え換えられる。つまり、これまでの仮

出典：「共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表理事 原ミナ太さん」

説の議論とピアサポート実践の聞き取りから、自立のためには「必要な支援を受ける」ことは当然必要だけど、その前提として必要な支援を受けるための準備が重要で、その土台がないままに一方的に支援だけを提供されても効果がないこと、土台をしつかりするためにはピアサポートの実践が大事にしてきたことが参考になりそうだということがわかったというわけだ。

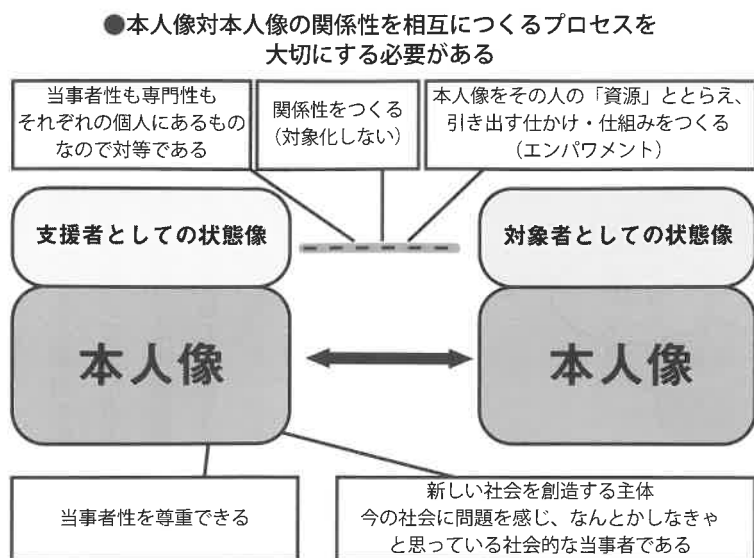
土台づくりは立場や役割を超える

じゃあ、どうやって実際の土台づくりのサポートが行われているかというと、いろいろなポイントがわかってきた。一つはとにかく話をすることだったり、人の経験を聴くことだったり、対話が重要だということ。また、そうした対話を核として、いろいろな活動を一緒に進めていくことも重要になる。また、人と人との関係も従来の支援の場とは異なることが確認された。これまでの困りごとの表面的な状態像に着目するのではなく、その背景にある土台をもつ一人の人としての本人像同士での関係性をつくるのが大事なんだ。

ギャンブル依存の当事者のピアグルー



図2 当事者参画型の支援体制の専門性



プの代表者は「悩みは『ギャンブル依存』という状態であっても、その背景は一人ひとり違う。その一人ひとりの事情に寄り添わないと自立はできない」と言っていた。困っている状態像を必死に治そうとしたり、改善させようとしたりするより、一人ひとりの本人像に迫り、その人にとって「ちようどいい生活を一緒に見つけること」が大事だと言っていた。

また、社会的養護経験者のピアサポ―

トの主宰者は「できるだけ生身の人間としてここにいますようにしています」と語っていた。支援者としてとか先輩としてとか肩書や役割ではなく、一人の人間として自分の悩みや生活の様子を語っている。どこの現場でも立場や役割を超えて、そこにいる人たちがみんなが支え合いに参加する姿勢がある。人と人との関係性をもにつくっていく仕組みがある。

それは、まさに社会活動で、みんな

自己の成長を保障し合っているともいえる。支援する側もされる側もそれぞれの表面的だったり、部分的だったりする状態像や立場や役割にとらわれずに支援のプロセスを創造すること、それが「当事者参画型支援体制」の基本なんだ。

ふらふらゾーン

そんないろいろな話や釧路のこれまでの実践から、自立のためには何が大切かを検討した。そこで出てきたのが「ふらふらゾーン」だ。困難を抱えた人が、必要な社会活動の機会を得て、土台をつくり、社会に貢献できるようにするために立場や役割を超えて人とつながることが必要だと思っても、そんな機会があちこちにあるわけじゃない。既存の仕組みで困難を抱えた人たちがつながる機会はいわゆる「支援を受ける場」であることが多い。そうになると、いつも「支援を受ける側」というレッテルがつきまとう。そうしたレッテルがいやでつながることを拒否する人たちもいる。だから、誰もが気軽につながることができて、社会活動の機会を得られる練習場のようなものが必要になる。それを「ふらふらゾーン」と名づけてみた。

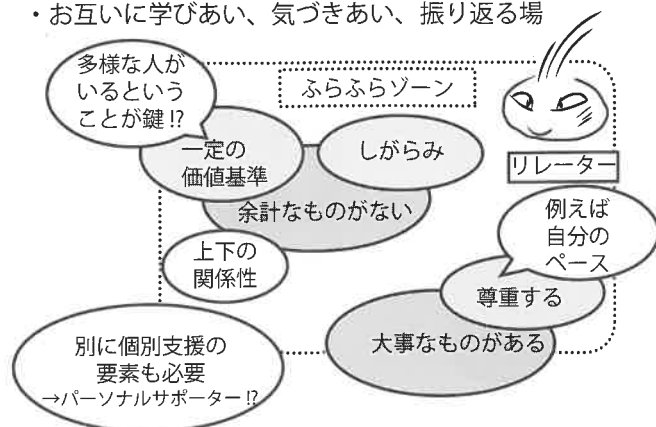
「ふらふらゾーン」は釧路実践でいうと2008年1月から取り組みが始まった中学3年生の勉強会「Zつとすくらむ scrum」や特集2で紹介した「地域起業創造センターまじくる」の取り組みから、その効果や重要性は現場感としては手応えがある。



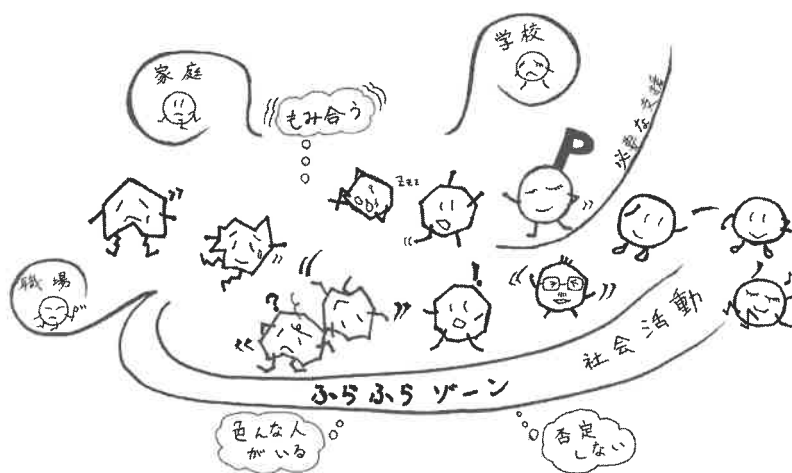
今、その手応えを各分野のピアサポートや全国の類似実践の人たちと議論を進めている。議論の中でわかってきたポイントをもとに勉強会やまじくるの参加者へアンケートや聞き取りもしているところだ。今のところ、ふらふらゾーンにとって重要な要素として次のようなことを考えている。

図3 中継地点、ふらふらゾーンについて①

- ・本人像対本人像の関係性を創造していく「場」
- ・道理同士をすりあわせる練習の「場」
- ・お互いに学びあい、気づきあい、振り返る場



- ① 敷居の低さ…気軽に気楽に来たり、つながつたり、利用したりできる
- ② 自由さ…時間や活動内容、方法が極力それぞれのペースやモードに合わせられる。制約や強制される場面が少ない
- ③ いろいろな人との出会い、交流…とにかく人に出会える。交流できる
- ④ フラットさ…上下関係や一方通行の固定化された関係性がなく、誰もが対等
- ⑤ 自分らしくいられる…自分を隠したり、装ったり無理をしなくてもよく、自然体でいられる
- ⑥ 受容性のある居場所…受け入れられて、居心地がよい。理解される、排除されない
- ⑦ 出番、役割がある…自分の力が発揮できる。人に頼りにされる
- ⑧ 社会とのつながりの実感…困っていることや希望や願いを発信できる。自分が社会とつながっている手応えや実感をもつことができる
- ⑨ 学び…今まで知らなかったことを知ったり、気づいたり、幅広い学びを得ることがができる
- ⑩ 内省的…自分を振り返ったり、知ったりする機会がある



これらの項目は細かいけれど、もっと基本的な部分では「対話」(話し合ったり、議論したりする)、「協働」(みんなで一緒に活動に取り組むこと)、「多様性」(いろいろな考えや価値観があること)の3つの要素は柱として考えている。

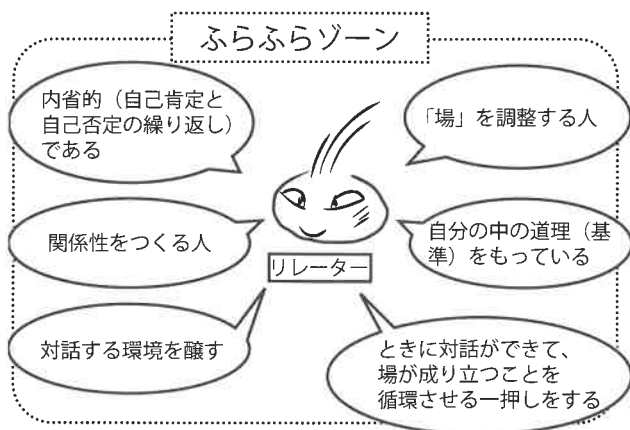


ふらふらゾーンにいる人

ふらふらゾーンを用意するのはそんなに難しいことじゃない。

実際にどんな分野にも「居場所」みたいなものがサービスや事業として登場しているし、いろいろな地域の活動でも「気軽に誰でも来られるところ」を設定することはよくある話だ。でも、ここでポイントになるのは単なる場のセッティングはできても、その場が前述のような要素が確保され続けるような運営をすることはちょっと難しいような点だ。

図4 ふらふらゾーンにいる人



ふらふらゾーンでは、ふらふらゾーンがふらふらゾーンであるための調整をする人が必要になる。それは、従来の支援者としての存在とは質的に異なると思われている。直接何かをしてくれる人ではなく、間接的な作用をもたらす人、ふらふらゾーンが場としての機能をちゃんと発揮できるような働きをする人だ。それを今のところ「媒介的人材」と呼んでいる。そうした人はこれまでの「コーディネーターとか、ファシリテーターとか、そんなものとは違うのか?」と言われることがある。近いんだけど、そうじゃないと思っている。これまでにある名前ですべて、そのなじんだ定義に引っ張られて、わかりにくくなってしまう。だから、もう少し厳密なイメージづくりや整理をしたいので、これまでの言い方はとりあえずしないでおく。

とりあえずのネーミングとして、今のところ考えているのが「リレーター」。これは従来の「サポーター」との対比を意識している。助ける人じゃなくて、「リレーション」(関係)をつくるための人という意味合いだ。他には「チューニングをする人」という言い方もできる。

ふらふらゾーンにつながる人たちが、自分の波長やベースを探していくときの

目安になるような基準を一貫として示す役割だ。評価する(ほめたり、批判したり)するのではなく、関わる人たち自らが自己点検をするためにはいつも変わらない客観的な何かのスケールのようなものが、必要になる。対話などの関わりの中かで、それぞれの気づきや曖昧さをアジャストしていくような基準が示されるとやりやすい。その役割が大事そうなこともわかってきた。まだまだ、ふらふらゾーンにいる人については議論や整理が途中だから、これぐらいにしておく。最終的にはもう少しはつきりできると思うんだ。

開かれたふらふらゾーン

ふらふらゾーンはいろいろな人たちが居心地よくて、居場所としての役割もあるけれど、そこが他の場のあり方を批判したり、ここだけが正しいというような絶対的な価値を必要としたりすることは好ましくない。ユートピアとしての地位やカリスマ的な存在になって、排他的になることを避けることが重要になる。「自立のために必要な要素」のところ、一人ひとりの自己が成長するプロセスと同様に社会の仕組みのあり方について考え直し、自立をめざすプロセスの中から明

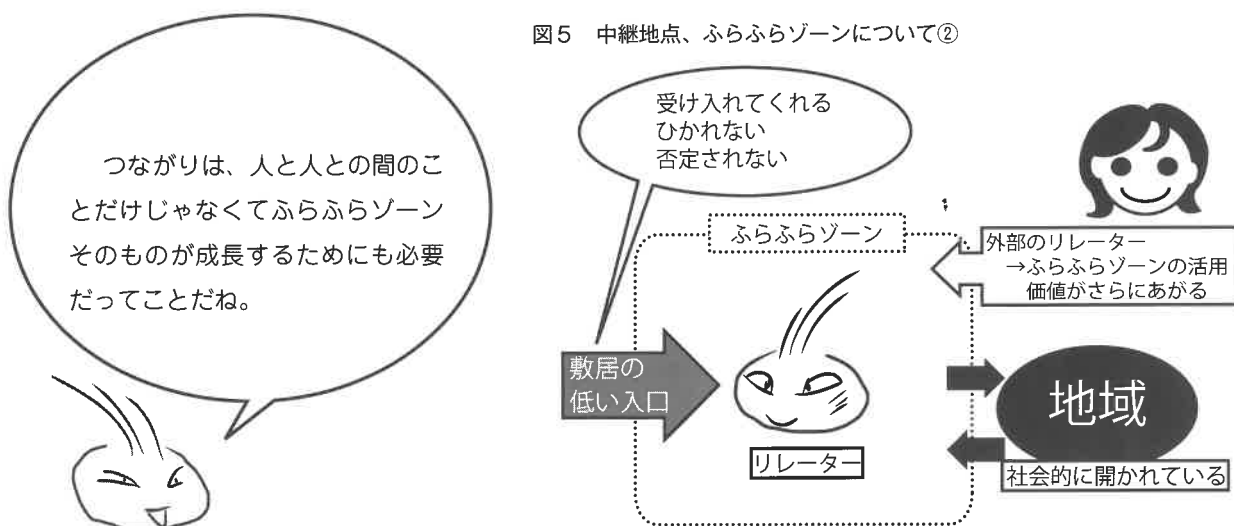


らかになる課題をもとにして、新しい地域や社会を変えていく、創造することとても大切な要素だと言ったよね。

社会を変えようとしたときに、これまでどうしても行き詰っていたことの一つに、今の社会に対して批判的になり過ぎて、自分たちの考え方以外を否定し、自分たちの活動だけを正しいと主張し、対立するような方向性になることがよくあった。でも、ふらふらゾーンは新しい社会や地域のあり方をそこにつながる人たちで創造し続けていく場だから、先に正しい答えや姿があるわけじゃない。いつも、多様な意見や価値観、文化を取り入れて、更新し続ける。

そのためには多様な人が出入りできる仕組みをもたなくちゃならないし、他の類似するふらふらゾーンともたくさんつながっているし、ふらふらゾーンではなくても多様な機関や既存組織とも出会い、交流し、交渉する機会をもつことが大事になる。

図5 中継地点、ふらふらゾーンについて②



強い専門システムと弱い専門システム

最後に、これまで整理しながら全体に関係する論点を一つ紹介しておく。自立のためには「できないこと、苦手なことをフォローするための必要なサポート」と「自分を含む社会資源を使いこなす準備・土台（＝自己の成長）」の大きく二つの要素が重要になると説明した。それらを保障するための人材や専門性についての問題がある。つまり、自立を促す手助けをするのはどんな人だったらいいのか？ これは、どんな人を育成したらよいかという基本的な仕組みづくりのことになるので、注目されている。

しかし、ここで注意しなければならぬのは「必要なサポート」と「自分を含む社会資源を使いこなす準備・土台」の両者は質的にずいぶんと違っている点だ。同じように自立を支えるための人的支援であるために同じような仕組みや発想で考えてしまいがちだけど、そもそもの必要性が生じた背景や意味合いが違うので同じように扱うのは危険がありそうだ。

このあたりを慶応義塾大学の総合政策学部の大江守之さんは、「必要なサポート」を「定型的機能」と名づけ、それを支え



るのが「強い専門システム」、「自分を含む社会資源を使いこなす準備・土台」を非定型的機能と名づけ、それを支えるのが「弱い専門システム」という言葉で区別しようとしている。弱い専門システムはこれまで家庭や地域の変化によって生じているつながりや支えの基本的機能の代替と言っている。強い専門システムと弱い専門システムは単純に対比できるものでもないし、仕組みにするときや人材の条件という発想をしたときにも同じように扱えないと考えている。

まだ、はっきりとわかっていないけど、おそらく強い専門システムは従来の専門家やプロというイメージで、属人的なスキルや専門知識が問われるのに対して、弱い専門システムは関係性そのものにスキルなどの専門性がついてくるから、「こういう人がいれば」という資質やスキルで簡単に語れそうにもない。それは、最初のほうで説明したとおり、「広い意味での自己」という発想が実は支援する側にも当てはまることに関連すると思っている。支援する立場の人も表面的な支援者としての立場や所属や役割ではなく、そのもとにある一人の人間としての本人像が実は大事で、支援者自らも生きるためのリテラシーを支援というプロセスに

おいて高めていく、学び合っていくような要素が重要になるのではないかと考えているんだ。

だから、弱い専門システムを担う人は極端にいうと誰でもいいのかもしれない。誰でもいいから、その人の存在に依存したり、左右されたりしないネットワーク的なつながりが一部として機能できるような視点が必要になる。また、人の問題ではなくふらふらゾーンのような「場」の問題をもっと議論しなくちゃならないことも考えられる。

おわりに

まだまだ議論や整理が途中だけど、いろいろな人たちから話を聞いたり、意見をもらったりしてまとめたことを説明してみたけど、わかったかな？ 調査研究はこれからも続くから、みんなも一緒に議論してみない？

それから、3月9日10日に大阪府箕面市萱野で全国のいろいろな「当事者」が集まるまじくるフェスタ2013 in 北芝を開催するよ。地域の中にいろいろな『当事者屋台』を回転させるというプランで準備が進んでいる。こちらにも、ぜひ参加してね！

どう？

少しはわかったかな？
今度、機会があったら
たまり場がうまく
まわるようなコツとか、
うまくまわった例なんかを
話したいなあ。



まじくるん

普段は目立つことは好まないが、ひそかにあちこちに現れて、さまざまな実践の大事な機能を共有化したり、言語化したりする。「まじくる」とは多様なものが主体的に混ざり合うさまを表した造語。



「何でも」 を検証する②

前号では、何でも相談においては「問題解決のプロセスを支援する」「つながることを支援する」ことが目指されるべきであり、その前提として、相談者のおかれた状況やコミュニケーションの能力、これまでの自己決定のプロセスを把握するという「アセスメント」が必要であると書きました。

今号では、この「アセスメント」を取り上げて考えてみます。

1. 何でも相談におけるアセスメントの

意義、役割

何でも相談においては、相談者が、「どんな状況のなかで」「どんな思い」を発信しようとしているのかを支援者自身の価値観をできる限り排して五感でとらえ、支援者自身が言語化して、可能であれば他の支援者のとらえ方と擦り合わせをし客観化したうえで、相談者本人にフィードバックして相互に共有する作業が重要になります。

支援者自身の価値観を排するとは、言葉でいうのは容易ですが、厳密に言えば不可能なことかもしれません。しかし、価値観を排することはできなくても、支援者自身が自らをふり返り、どのような価値観をもって行動しているのかを自覚することで、客観的な事実とそれに対して抱く支援者の感情とをある程度分けて把握することは可能になります。

五感でとらえるとは、面接場面で観察する、耳を傾けるだけにとどまらず、相談者の生活場面に具体的にかかわることによって得られた情報を総合化することを目指します。たとえば、買い物に同行してその人の商品の選び方やお金の支払い方、商店の人たちとの関わり度合いを知る、家族の話し合いに同席して家族間の緊張度の高さ・低さを感じる、通院に同行して主治医とのやり取りを見聞きす

る、役所での手続きに同行して説明をどのように理解するか・しないかを知る、リアルタイムの反応を見ることで思考やコミュニケーションの特性を知るなどです。知的障害があるからといって社会生活スキルが低いかといえば、必ずしもそうではありません。同様に、知的レベルが高くても経験が極端に少なかったりストレスにさらされる状況が長く続くことで、社会生活スキルが低められていることもあります。これらは、面接場面でご本人とやり取りをするだけではなかなか得られない情報です。

情報を総合化するには、支援者がまず自分のレベルで言語化する作業が求められます。相談者の人間性や個性、世界観、言葉や行動を通じて発信しようとしている思い・願い、おかれた状況、相談者から見える周囲、抱えている生活課題、理解者の存在等について、過去から現在に至る生活史と現在の環境のなかから拾い上げた情報を総合化するのです。言語化された情報は、他者との間で共有することが可能になります。先述したように、私たちは私たち自身に内在する価値観から自由にはなり得ませんし、一つひとつの言葉のもつ意味や価値も個々人によって微妙に異なるのが常です。異なる価値観や経験をもつ同僚や関係機関の担当者との間で相談者に関する情報を持ち寄



り、擦り合わせができれば、情報の精度を上げることも可能になります。

こうして整理された情報を相談者自身にフィードバックし、ズレの有無を確認して共有します。この作業は、問題解決をする主体はあくまでも相談者本人であるという点から重要であることはもちろんのこと、相談者が自らをふり返り、等身大の自分を改めて理解するという点からも非常に意味のあるプロセスであると考えています。安定した生活を送っていた時期には安定につながる要素が、不安定な時期には不安定を生み出した要素が必ず存在します。相談者が自分自身の内面的な要因と周囲の環境要因の中からそれらの要素を見つけ出すことで、これから先の生活に必要な配慮や工夫、スキルが自覚されていくのです。

2. 具体的な事例から

以下にご紹介するのは架空の事例ですが、筆者が現場で関わって実際に経験したエピソードをもとにしています。事例を素材に、先述したアセスメントのポイントを表（36頁）で示します。

【事例①】

高校を中退していくつかアルバイトをしたが续かず、家にひきこもりがちな20代前半のイチローさん。中学の頃にいじめのターゲットになり、友だち

もいない。5歳上の姉には重度の知的障害があつて生活全般に介助が必要であり、自宅から通所施設に通っている。イチローさんは以前は大きな声で騒ぐ姉に対してキレることがあつたが、母のアドバイスで最近では別室に行くなどの対処を覚え、逆に母を心配して手伝ってくれる。母は助かつているが、イチローさんに頼つたままではイチローさんの自立を妨げてしまふという気持ちも強く、生活支援センターに相談することとした。母は一人で来所し、「小さい頃から、一人で遊ぶ手のかからない子だった」と話した。

今回は、イチローさんと直接会うこととなつた。イチローさんは、「働きたいが、自分に合つた仕事が見つからない」と話す。これまでのアルバイト経験についてたずねたところ、「スーパーのレジや警備員、倉庫作業などいくつかやつたが、倉庫の一人仕事がいちばんよかつた」「人間関係が苦手。あちこちから同時に声をかけられると混乱する。キツく注意されると落ち込んで、引きずつてしまふ」と答えてくれた。

その後、ハローワークで求人を見つけ面接に行くなどするが、なかなか採用に至らない。また、若者サポートステーション主催の講座を案内して一緒

に参加するが、グループワークではうつむいたままで、話し合いへの参加が難しかった。職員は極端に落ち込んだ様子のイチローさんの気分転換を図るため、コーヒーでも飲んで行きましようかと誘つた。ファミリーストランでは高校生のグループが騒いでおり、イチローさんは気になって職員の話に集中できない様子だった。また、レストランの店員がすすめるままにケーキセットを注文したものの、実際に運ばれてくると「僕は甘いものは苦手だからどうぞ食べてください」と職員にケーキを差し出し、「本当は頼みたくなかつたのに、あいつが無理に押し付けるからだ」とブツブツつぶやいていた。

これらの情報を持ち帰ってセンター内で話し合つた結果、①発達の遅れやバランスの悪さがある可能性を検討してみることで、②障害者手帳を取得しジョブコーチ等の就労支援を活用することで本人の不得意を補う提案していくこと、の二点を整理し、再度、母をまじえて面談することとなつた。

面談時、生活支援センターからの提案に対し、母は「アルバイトを見つけては辞めるということの繰り返しを何とかしたい。手帳が取れて支援が受けられるのであれば、その方向でお願いします」と積極的だったが、イチロー



さんは「僕は、姉のような障害者ではありません」と硬い表情を崩さなかった。

職員 若者サポートステーションの講座のグループワークではずっと下を向いていたようですが、あの時はどうしたのですか？

イチローさん 次に誰が話すのかわからず、自分で話すところではありませんでした。以前に働いていた会社で混乱したときも同じような感じでした

職員 レストランでは何が気になったのですか？

イチローさん あんなに大きな声で騒がれたら、会話なんてできません。職員さんには僕の声が聞こえましたか？

職員 確かに少し騒々しかったようですが、私にはイチローさんの声を聞き分けることができました。キーキの注文はなぜ断らなかったのですか？

イチローさん 落ち込みモードに入ると、人とのやり取りが面倒になるんです。放っておいてほしいのに話しかけられるから、ハイハイと言っていたらキーキが出てきてしまいました。それでまた落ち込みます。他の人はどうやって落ち込みから抜けているんですか？

職員 もしかしたら、イチローさんは音の聴こえ方に特性があって集中が難

しいのかもしれませんが。気持ちの切り替えもとても苦労されていますよね。そのあたりを一度、専門の精神科医に相談してみませんか？

イチローさん 中学の時に「空気の読めない奴はあつちに行け」と言われ、空気はどうやって読むのか聞いたら笑われました。自分はまわりと少し違うのかもしれません。自分の疑問を病院で相談できるのであれば受診してみたい。

面談の結果、イチローさんは精神科

の受診を了解し、生活支援センターが改めて成育歴を整理したうえで専門医につなぐこと、就職活動については本人の意思を尊重し、当面はこれまで通り、ハローワークや求人情報誌等を通じて取り組んでいくこととなった。

【事例1のポイント】

場 面	生活支援センターが着目した点・意識した点
面 談	・小さい頃のエピソードや本人の苦手さに対する認識は、発達の凸凹を感じさせる ・姉に重度の知的障害があるので、本人も母親も、障害＝重度障害のイメージを持っているかもしれない
同行支援と支援者間での振り返り	・グループワークへの参加が難しかったのは、自信の無さか？またはグループでさまざまな意見を出し合うという設定に違和感があったのか？ ・ファミリーレストランで高校生の声が気になったのは、中学時代にいじめられた経験を思い出したのか？または騒々しい音が会話に集中することを妨げたのか？
フィードバック	・支援者が同席した時間に起きたエピソードを本人に確認することで、本人の内面の動きや自己理解を知る ・実際のことがらに照らし合わせて本人の感覚や認知の特性を共有する →過去を振り返り、気づきや新たなエピソードを引き出す



【事例②】

40歳代夫婦と5歳男児。夫のタロウさんはトラック運転手で勤務時間が不規則であるうえに、出来高払いであるために収入も不安定。妻のカズコさんは日中の仕事以外に、夜はパートで働いている。5歳のヒカルくんは保育園に通うが、他の子どもにも暴力をふるうなど、落ち着きがない。生活に困って借りたサラ金などの支払いがふくらみ、アパートの家賃も支払いの遅れや滞納が続くようになった。民生委員をしている大家さんのすすめで、生活支援センターに夫から相談の電話が入り、夫婦が家にいる夜間の時間帯に訪問することとなった。

自宅を訪ねて話を聞くと、タロウさんが饒舌に話を始める。部屋には大型テレビやゴルフセット、有名メーカーの掃除機等が所狭しと置かれている。ゴルフセットにさりげなく話題を向けると「仕事の付き合いもあるから、これぐらいは持っていないとね」と答えた。カズコさんに対し、カズコさん名義の借入れの経過やヒカルくんのことなどを質問するが、スムーズな返答が得られない。遅い時間であったため、いったん話を切り上げ、改めて訪問することを約束する。

数日後、タロウさんから電話があり

「夫婦とも週末に仕事が入ったので、子どもを預かってくれるところを探している」と相談を受ける。保育園でたびたびトラブルを起こしていると聞いていたため、生活支援センターが直接に対応することを提案し、了解を得る。当日、ヒカルくんを迎えに行くときカズコさんが持たせたカバンには弁当に手紙が添えられており、配慮すべきことがらとお礼の言葉が丁寧に書かれていた。ヒカルくんは叫び声をあげながら終始、走り回り、職員がへとへとになるほどだった。

センター内の会議では、家のなかの様子やヒカルくんの多動な様子について話し合ったが、まだ不明な点が多く、当面は直接的な訴えである債務整理を中心にヒカルくんの預かりなどの生活支援も行っていくこととした。

その後、数回の訪問や来所を繰り返して、書類の整理を手伝ったうえで、市役所の無料法律相談に同行した。弁護士からは現実的には自己破産しか手段がない旨を告げられ、タロウさんは感情的になって「こんな相談、無駄だった」と一方的に席を立ってしまった。翌日にセンターから電話をしたところ、「職員さんは自己破産を指示されることをわかっていたのか？」と責めるような口調で聞かれたため、「私た

ちは法律の専門家ではありません。どうすればよいかを一緒に考えていきましょう」と伝えたが、「もう結構です」と電話を切られてしまった。

数日後、カズコさんから電話があり「夫が夜勤で不在の日に話したい」と言われた。時間を合わせて訪問したところ、「夫に給料をすべて取り上げられて食費にも困っている。どうしたらよいか？」と訴えられた。暴力を受けたことがあるかをたずねたところ、「数年前までひどい暴力を繰り返し受けていた」と答えた。職員は、「あなたはDVを受けています。現在、身体的な暴力が止まっているとしてもDVを受けていることに変わりはありません。あなたは無力な存在ではないし、不安に怯えているヒカルくんのことでも守らなければなりません。逃げる決意をするなら、支援の体制をつくりまします」と伝えた。カズコさんは「自分がDVを受けているとは思っていませんでした。生活に必死で逃げるなんて考えてもみなかった。そんなことができるのですか？」と訝しげであったが、数日後、「ヒカルが父親を怖がっていることがはっきりわかり、気持ちが固まりました」と電話が入った。



【事例2のポイント】

場 面	生活支援センターが着目した点・意識した点
訪 問	・収支のバランスの悪さ ・消費の優先順位のズレ（高額な家電等を買って揃えているが、家賃を滞納している） ・妻の返答の鈍さは、知的障害が疑われるのか？債務のことや子どものことなどストレスがあるからか？DVを受けているのか？
ヒカルくんの預かり	・ヒカルくんの落ち着きのなさは何が原因しているのか？虐待的な状況があるのか？ ・お弁当や手紙にはカズコさんの家事能力や配慮が感じられる
法律相談への同行	・タロウさんは感情のコントロールが難しい面がある ・共感的な立場に立たないと信頼関係の維持が難しいが、本人の意向をそのまま受け入れるだけでは問題解決の進展は望めない
フィードバック	・カズコさんがおかれた状況を明確な言葉で伝え、気づきにつなげる ・無力な存在ではないこと、子どもを守るべき役割があること、支援者がいることの自覚を促す

3. まとめ

何でも相談におけるアセスメントについて、事例も参考にしながらプロセスの解説を試みました。フィードバックを終えて以降の展開を考えると、アセスメントが相談の全体に占めるボリュームは質的にも量的にも非常に大きいといえます。フィードバックは相談者本人にとっては自らの問題解決に動き出すための基盤となるものであり、基盤がつけられることで解決に向かう動機がより一層高くなることも多くあるからです。

「指導」や「情報提供」に偏る相談は一方通行になりがちですが、あらかじめフィードバックを意識した相談は、相談者と支援者の協働作業となります。問題解決のプロセスのなかで協働作業の意義が相談者に実感されることで、つながりのなかで生きていくことの大切さが相談者と支援者の双方に再認識されるのだと考えています。



朝比奈ミカ

大学の文学部で古代史を学び、卒論のテーマは『古代の障害者』。口頭試問では何のコメントももらえず、「引き続きがんばってください」と言われて卒業しました。八法改正が議論された頃に東京都社会福祉協議会に就職。阪神・淡路大震災、介護保険、基礎構造改革等々、福祉の激動の時代にさまざまな人と出会って仕事をし、具体的な支援の現場にもぐりたいと考えた頃に、出身の千葉県が何だかおもしろそうな状況になっていて、「がじゅまる」の仕事をするようになりました。いかにもなベタな感じの支援を重ねて早7年。立場や分野を超えた「共感」が仕事のエネルギーになっています。



シリーズ

異分野対談



つなちゃん
セクシャルマイノリティと



つなちゃん
発達障がい専門家に聞く

生きづらさを想像できる

支援のために

今の地域社会の中で、なかなか理解されずに、きびしい排除の状態にあるのが「発達障がい」と「セクシャルマイノリティ」。

「おかしなやつ」「困った人たち」として差別され、排除されることはもちろん、「かわいそうな人」「適応させなくちゃ」と一方的に保護や支援の対象にされてしまう現実もあります。何がどうして『生きづらさ』を抱えることになってしまっているのか？ 一見、まったく違うかと思われる二つの分野の専門家を同時に釧路にお呼びした際に、現状や排除構造について、FMくしろのパーソナリティさこちゃんと一緒に聞いてみました。

「生きづらさ」とは何か？

さこ ● 今回、「生きづらさ」について考えてみようと思いますが、発達障がいから見てズバリ「生きづらさ」とは何でしょう？
とも ● わかってもらいにくさみたいなのかな。「これは楽しいよね」って言ったら、

周りのみんなは「え、楽しくない」って世界に生きていることが生きづらい。周りとかちょっと感覚が違うことで、わかってもらえないところで生きていくこと。違う感覚のものがあるという「ズレ」みたなものですね。

ひお ● 「ズレ」がなかなか埋まらない。「ズレ」だけなら誰にでもありますよね。誰にでも大小があるけれども、発達障がいの場合はその「ズレ」がわかりにくいし、埋まりにくいのが特徴だと思います。

とも ● そうですね。埋まりにくいから、一人だけ浮いてしまったり、わかってもらえないとか、変な人とか、わがままな人とか危ない人とか、マイナスイメージでとらえられてしまう。本人にとっては、他の人とは違うことがそんなに嫌というわけではないのに、マイナスイメージでとらえられることによって、他の人から見ると迷惑がられたり、嫌がられたり、トラブルが起きてしまう。

さこ ● セクシャルマイノリティの支援

活動をするつなちゃん立場としては「生きづらさ」っていうのは何ですか？

つな ● これまで、セクシャルマイノリティの中ではどうしても「つらさ」とか「苦しさ」みたいなものを中心に取りましたが、今回ともちゃんから発達障がいの話を聞いていて、他の人との話の通じなさでは、共通するかもしれません。「同性が好き」とか「性別に違和感がある」ということがなかなか通じない。それだけではなく、攻撃やいじめの対象になってしまうのが少し違うかもしれません。でも、「ズレ」というふうにとらえることで、これまでよりも身近なテーマになるのかもしれない。

さこ ● つなちゃんが考える「ズレ」ってのいうのは具体的に何ですか？

つな ● ものすごい大きいものがあると思います。ちょっと前まではセクシャルマイノリティはいわゆる「アブノーマル」でした。でも、「これはノーマル」「これが普通」「男は男らしく、女は女らしく」「男だった女を好きになるもの」「女だった男を



好きになるもの」という通説が意外と大きいのだなあと痛感するわけです。多くの人にそうした考え方がはびこっている。はびこっているとかいうと、被害的な感じがしますけどね（笑）。それがものすごく大きくて、そうじゃない自分に気づいたときに、すごく生きづらさを感じる。常に「前はおかしい」と言われているわけでもないけど、はびこっている常識にじわじわやられる感じ。自分自身で「それでも生きていくんだ」「私っておかしい」という重さみたいな感じがあります。

ともちゃんこと

大友愛美（おおともよしみ）

NPO 法人ノーマライゼーションサポートセンター
こころりんく東川 副理事長

東京オリンピックの年に北海道で生まれ、北海道で育った生粋の道産子。大学で福祉を学び、以後福祉の仕事ばかりしている。変化が苦手なためと思われる。最初の現場だった知的障害者入所施設でも、その後自分で立ち上げたレスパイトサービス事業所でも、自閉症の人との出会いが多く、失敗と学びを繰り返す。最近では発達障がいなど生きにくい状況を抱えた人の相談や支援の仕事のみならず、支援者支援も大きなテーマとしている。

法律の効果と副作用

さこ ● 法律[※]が整備されることによって逆に生きづらくなること、弊害みたいなものもあるのですね。

ひお ● 弊害っていうのか、ともちゃん的に言うと「副作用」ですよ。

さこ ● 法律ができたということは「国が対策に動いた」ということなんでしょうけれどね。

ひお ● 対策に乗り出しちゃったからこそ、隠れていた問題が出てきた。

つな ● セクシュアルマイノリティに関しては2004年にGID（性同一性障害）特例法ができたのですが、それ以前は何にもなかったですよ。それができたことは一つの風穴でした。昔は「性転換」と言われていたものが「性別適合」、つまりは本来的な性に適合させるという言葉になり、それが法律に書かれて一般的に知られて、性同一性障がいにも理解が広がっていくのは大きな意味があります。

この前、電車の中で隣の若者二人が「同僚のあいっさ、性同一性障がいなんだって」「へーそうなんだ。そりゃ大変だな」という会話が耳に飛びこんできて思わず聞き入っちゃいました。馬鹿にしているわけじゃなくて、普通に会話していたのです。少し前だったら、「あいっさ、オカマ?」「えーっ、気持ち悪い」みたいに言われかねない

※発達障害者支援法（2005年施行）：長年にわたって福祉の谷間で取り残されていた発達障害者の定義と社会福祉法制における位置づけを確立した法律。発達障害者の福祉的援助に道を開くため、早期発見、行政の責務、自立や社会参加に関する支援についてなどをはじめて明文化した。

※性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（2004年施行）：性同一性障害を抱える者における社会生活上のさまざまな問題を解消するため、法令上の性別の取扱いの特例を定めた法律。性同一性障害者のうち特定の要件を満たす者について、家庭裁判所の審判により、法令上の性別の取扱いと、戸籍上の性別記載を変更できるようになった。

のに、法律の影響だと思うんですけど、「へー、大変だな」って反応になる。副作用があるにしても、そうやって理解が広がるのはとても大きなことだと思います。

とも ● 私もついこの前に同じようなことがありました。札幌の地下街を歩いていたら、後ろを歩いていた若い女の子が「あのね、〇〇ちゃんのところの弟さん、ADHDなんだって。それでね、お母さんすごく大変みたいなのよね」という会話をしました。巷の普通の会話でそういった言葉が出てくるようになったんだなあって。発



つなちゃんこと

tuna

芸術学と工学を合わせた大学を卒業する。「まとも」な仕事に就けないという「自信」から、一度は全く関係のない飲食関係の職に就く。その後、女性に対する暴力被害支援関係の仕事に転職しつつ、セクシュアル・マイノリティのコミュニティの場と出会う。「コミュニティ」という社会資源の重要性を感じながら、現在はセクマイ支援活動にも関わっている。「包摂」って「分け過ぎない」ということかしら、と「男女」の区分けに思いをはせる。



達障害者支援法ができるまでは、発達障がいの人たちが制度のうえでケアを受けることができなくて、不利な部分がたくさんあったのです。でも、法律ができて障がいの一つとして認められることになりました。それまでは、わがままだとかサボっているとか本人の努力が足りないと思われるいたのが、本人の努力や親の育て方の問題ではなく、生まれつきの苦しさや特性みたいなものだという認識が広がっていると思います。

でも、一方では副作用もあって、「障がいなんです」というと、「そうか、障がいなんだ。じゃあ、治らないしね」ということで障がいの枠の中にはめてしまいうような、「親切的な排除」が起こってしまっていることもあります。障がいというくくりがある

排除のための正当な口実になってしまいうようなことが起こります。

周囲が正しく知ること、本人にとつて理解してもらっていることもありますが不利益になることもあります。法律ができて、わがままじゃなくて障がいなんだ、だから支援が受けられるということが浸透する一方で、現状では副作用としての親切的な排除の問題もまだまだあるので複雑ですね。

マイノリティとバラエティ

さこ ● 実は、私はつなちゃんの話聞くまでは、セクシュアルマイノリティの人たちはみんな性同一性障がいだと思っていました。

つな ● そうなんですか？

さこ ● そうなんです。法律ができて、一般化したからか、ドラマで取り上げられたからかはわかりませんが、そう誤解していたのですよ。

つな ● そう思っている人は多いみたいですね。セクマイ＝性同一性障がいみたいな誤解は多いことは再認識しました。それは私の知識不足でした（苦笑）。一応、みなさんにも基礎知識を伝えたほうがいいですね（笑）。

簡単に説明するとセクシャルマイノリティの主なものにはLGBTともいいます

が、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの4つがあります。

- ・レズビアン 女性を愛する女性
- ・ゲイ 男性を愛する男性
- ・バイセクシュアル 両方の性を愛する人
- ・トランスジェンダー 愛する相手は関係なく、性の自認が生物学的な性や戸籍の性とは違う人。そのなかでも「生物学的な性を変えたい」「戸籍を変えたい」場合が性同一性障がい。

つまり、今、有名になっている「性同一性障がい」はセクシュアルマイノリティの中でもほんの一部のことです。

ひお ● そういう意味ではドラマの力はすごいですね。ドラマで性同一性障がいがある女優さんとともに登場すると強烈な印象とともに、みんなの中に認識されていく。最近では、発達障がいもよくドラマに出てきますよね。特にアスペルガーの主人公が多いですが。

ドラマに出たものだけがクローズアップされていくという危険はありますね。でも、だからこそ、みんなが知っていくって側面もある。

つな ● そうそう、本当はもっといろいろなあるんですけどね。性分化疾患とか、Aセクシュアルとか；でも、とりあえずさっきのLGBTがマイノリティの中でも人数が多いんですけど、実はもっともつという



ろあります。だから、「セクマイ」ではなく「セクシユアルバラエティ」セクバラ」だって言ってるんですよ。

ひお ● そうそう。そういう意味では発達障がいも「発達のバラエティ」だから「ハツバラ」だって言ってるんですよ。認知のバラエティとも言えるから「ニンバラ」でもいいですが（笑）。

さこ ● 本当にバラエティ豊かなんですよ。そう考えると実は人間みんなバラエティですよ。

ひお ● そうなんです。ノーマライゼーションって言って、「一体、ノーマルって誰？」みたいなことを言い出すと、よくわからなくなります。でも、世の中の中心に

平迫なおこと
さこちゃん
FMくしろパーソナリティ

自分自身をあえて表現すると「超楽観的な引きこもり?!」。「『社会問題』をどのメディアでも伝えることのない角度や視点でわかりやすく、伝えたい!」という思いからひおPと「おいしいマチづくりラヂオ」を始めては2年半。ひおPとさこちゃん毎週月曜日の19時半〜20時（再放送は土曜日の9時半〜10時）に真面目な話題を楽しそうにしゃべり続けている。

「おいしいマチづくりラヂオ」はインターネットのサイマルラジオにてどこからでも聴くことができます。過去の放送もPodcast (<http://www.fm946.com/podcast/podcast09/>)で聴くことができます。

いる多数派の人たちとは違って周辺に追いやられてしまう少数派の人たちでは、社会的な不利益があるのは確かですよ。だから、「みんな違うよね」って片づけられることには危惧を感じるわけです。

深刻なことをチャラチャラ言う

さこ ● 私は改めて、メディアの責任は大きいなあと思います。

ひお ● 特に事件に伴ってニュースになっちゃうと悪いイメージ広がりますよね。私はむしろ「生きづらさを万歳!」って感じになるといいなあと思ってるんですよ。生きづらさを出すと不利になっちゃうから、どんどん生きづらさがわからなくなるし、生きづらいことが社会に反映されない。だから「生きづらいんだ」ということを言ったほうが得をするようになるというなあと思います。私は常々「困りごと宝」と言っていますが、みんなが「困っています」と言える社会になるといいなあと思います。別に恥ずかしくないよって思えたらいいと思う。

つな ● でも、やっぱり、「重い」って言われるのが嫌なんですよね。いろいろ大変なことがあるから言っていると「つなちゃん、重い…」って言われたりして。そう思われるのはやっぱり嫌だと思って、考えたのが…「生きづらい」ってチャラチ

ヤラ言う!ってこと。（一堂、大爆笑）

重いことを軽く言っちゃう。「生きづらいんだ!」「セクマイなんだ!」って感じて。

ひお ● 私も支援の中で支援をされる側のインタビューをしたとき、いろいろと大変な経験をしているあるお母さんに聞いたら、支援の中で馬鹿にされたり、怒られたりするのはもちろん嫌だけど、一番嫌なのは「同情されたり、かわいそうと思われること」って言ってたのが印象的でした。そりゃそうだなあって。受けとめる側が勝手に深刻になるのって、何だか違うよなあって思っちゃう。

つな ● 重たくさせられる。支援者が自分たちの重い気持ちを軽くしてくれるんじゃないかって思っていたら、一緒に重くなっちゃう…。

とも ● それは、重く受けとめないと失礼にあたるっていう思い込みが支援者の中にはあるかもしれないですね。

つな ● 基本は私たちの悩みて深刻で重いですよ。でも、深刻にならないで「真剣に誠実にやる」って感じかな。まあ、チャラチャラが誠実じゃないって言われたら終わりですが（笑）。

ひお ● 誠実なチャラチャラ感を極めなくちゃ（笑）。この一見、両極に思える「誠実とチャラチャラ」を両立できるのが大事。

つな ● 知らないから、最初は深刻に重く感じるかもしれない。でも、どんどん知っ



ていくと「深刻で重いのは、よし、わかった。でも、頑張ろう」っていう感じになっていく。そこが支援の大事なことかな。

共生のためのヒント

さこ ● 2人の話を聞いて「生きづらさがあるのはわかった。そういう構造があるんだね」ということがわかって「じゃあ、これからどうしたらいいの?」「私たちに何ができるの?」「どうしたら、生きづらくなるの?」って思うんですよ。「共生のためには」というコツを教えてください。

とも ● 「共生」って「共に生きる」って書くからみんなと一緒に仲よくって思われがちですが、実はみんなで仲よくする必要はないと思っています。みんなが仲よくなくてもいいし、群れることがいいことでもない。発達障がいの人たちの中には群れさせられるから社会が嫌いだという人もいます。群れたくないというニーズも認めてほしい。だから、みんなで一緒にいて、仲よくしていることが共生だというイメージをもってしまうと、仲よくできない人が排除されてしまうんですよ。

だから、共生はおそらくいろいろな違いや特徴があるなかで、人と違うことで排除されないとかまっとうな扱いを受けないことがないという意味だと思います。そういうことをどうやって伝えていったらいいか

が私たちの大きなテーマです。でも、難しいんですよ。違う人を何かカテゴライズしてくくって、理解したいという人間の欲求みたいなものがあって(笑)。

ひお ● そうそう。考えれば考えるほど、次から次へと人間の本質的な欲求との戦いみたいなことが浮上しますよね。「異質なものは避けたい」とか「整然と区別して理解したい」とか「曖昧なものは気持ち悪い」とか、どこまでファジーが許されるか?って感じですよ。

とも ● だから、どこまでいつてもきりがないんですよ。曖昧が許されないから、これが「共生です」って言った瞬間にそうじゃないものが排除される。その繰り返しです。

つな ● 私は「関わり」が大事だなんて思います。今回、日置さんと出会っていろいろな関わりがあって、いろいろなことに気づいたし、わかってきた部分がたくさんあると思うっていますよ。そう考えると「関わり」が増えれば、それだけ微調整がしやすい、違いをすり合わせるための方法みたいなものがわかっていく感じですよ。もともとと単純に「関わり」を増やすような場面が多くなると、少しは変わるかもしれない。いろいろな人たちが関わる機会が増えることが地味だけど大事ななって思います。

さこ ● まじくるフェスタであおい係長と

つなちゃんがトークをしたときに「醸し出す」ってことが話題になりましたよね。「関わり」が増えるってことは醸し出される感じですか?

つな ● そうそう、「醸し出し場」が大事って話ですね。

ひお ● ともちゃんのところの「共生サロン」はまさに醸し出し場ですよ。いろいろな人たちがいろんな感じで来て、醸している感じですよ。

とも ● そうです。そして周囲からは、「意味わかんない」って言われるんですよ(笑)。

ひお ● 行政にお金出してもらってるのに、何やってるんだか意味わかんないって言われちゃう。醸し出し場ってうまく理解されないのが難点です。発酵させてものになるにはやっぱり時間がかかるんですよ。3年とか5年とか。それが、醸している、発酵している最中を見られても、「こんな美味しくないもの!」って思われちゃうんですよ。発酵途中で食べないで、開けないで、評価しないで、ちょっと待って!って思うわけですよ。(一同、爆笑)

さこ ● いろいろな人たちが関われる「醸し出し場」は大事だけど、難しさもありそうですね。これからますます注目されるテーマになりそうですね。



制度のことでもくっちゃべるんだべよ

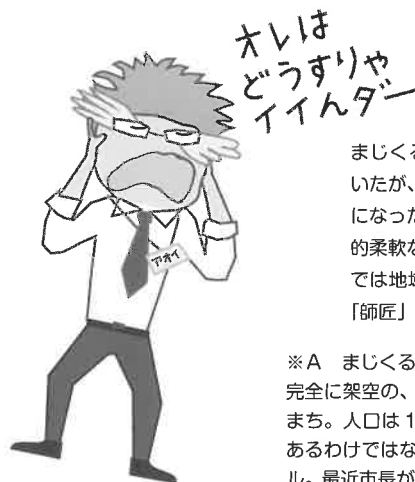
(制度のお話でもしましょうか)

2



師匠

謎のキャラ。制度の成り立ちや役割、使い方などには詳しい模様。又村係長が困ったときに相談する相手らしく、いろいろとレクチャー、議論してくれる。が、なぜかバリバリの相模弁。



オレはどうすりゃ
イインダー

アオイ係長

まじくる市役所^{※A}の係長。長く障がい福祉部署にいたが、市長が代わって「地域づくり」が重点政策になったことから、地域づくり部署へ異動に。比較的可柔かな考え方をするが、障がい福祉畑の知識だけでは地域づくりに役立つ制度はつくれないと考え、「師匠」のレクチャーを受けに来た。

※A まじくる市

完全に架空の、しかし皆さんが住んでいる地域とよく似たまち。人口は10万人くらい。財政規模も中の上、余裕があるわけではないけど破たん寸前というほどでもないレベル。最近市長が代わって「地域づくり」に力を入れはじめた。



ん？読者って何ですか？



じゃあよ、オメーが知ってる範囲でいいから、最近の動きを振り返ってみな。そしたら読者の皆さんも助かんべえよ。



それは確かに…特にここ最近の動きは普通じゃなかったですしね。



オメーの仕事にも関係はあるから、フォローしねえわけにもいかなえしなあ。

しかしまあ、福祉っていうか社会保障っていうかこの業界っていうか、何しろ半年も会わないと別世界になっちゃいますね。



…相変わらず抽象的で無茶なフリですな（笑）

※B 相模弁
主に旧相模国エリアを中心に、神奈川県域で話される方言。語尾が「〜だべ」「〜じゃんか」になる。「熱い」を「あちい」と言うなどの特徴がある。喋り方は少々乱暴。特徴的な単語が出てきた場合は別途解説します。



おつ、もうそんなになるのけ？、どうよ？



師匠、お久しぶりです。半年くらいお会いしてなかったですかね？





んだよ、うざってえな。さっさと話
しゃあいいんだよー^{※C}

※C うざったい
比較的全国的に使われている言葉ですが、も
ともとは相模周辺の方言。



はいはい…

何しろ一番の話題は「社会保障と税
の一体改革」でしょうね。報道はどうしても
消費税の引き上げが話題になりますけど、法
律が通つたら、社会保障分野の動きも相当な
動きがありますよ。^{※1}

※1 社会保障と税の一体改革

1995年に取りまとめられた「社会保障体
制の再構築（勧告）」を皮切りに、高齢化や
少子化をふまえた今後の社会保障のあり方が
議論されていきました。途中、小泉政権によ
る「構造改革」（社会保障の給付費抑制策）
を経て、政権交代後に「社会保障・税一体改革」
議論がスタートし、過去の議論もふまえて
2012年2月に「社会保障・税一体改革大
綱」を取りまとめた。この大綱に基づいて、
各種社会保障関係の改正法案や、その財源と
なる消費税の増税法案が国会に提出されてい
る。8月初旬現在、消費税増税法案の取り扱
いで与野党が駆け引きをしている。社会保
障分野のポイントは、表を参照。



オメーから見て、一番でけえ改正は
何よ？

今回は社会保障関係のいろいろな制

まじくる制度

度をいわず「今風」に変えていく話なので、
どれも影響がありますけど…やっぱり子育て
分野ですかね。ずっと話題に出ていた「総合
こども園」は結局やらないことになりました
けど、役所から幼稚園と保育所へ支払う公費
のお財布を一元化することになりましたし、
消費税を増税する分から7000億円くらい
は子育て支援に充てるみたいですから。

何しろ、今まで社会保障といえば医療・介護・
年金だったところに「子育て」という分野を
加えたのが大きいでしょうね。



あとはよ？

年金制度ですかね。



これも民主党のマニフェストに掲げ
られていた「最低保障年金」については先送
りになりましたが、所得が多い人の年金支給
額を減らす一方、障害のある人や所得が少な
い人へ加算を設定する方向になりました。



で、何よ？オメーの専門分野は出て
こねえのけ？おろ抜かれちまったの
かよ？^{※D}

※D おろぬく
引き抜く、間引く、抜きにする…などの意味。



障害分野ですか。いやいや、出てき
ますよ。ただ、社会保障と税の一体
改革とは別のところで議論していたので…



おお、そだったな。推進会議とか
何とか言ったよな。



はい。正式には「障がい者制度改革
推進会議」ですね。特にこの1年く
らは議論成果ともいえる法律の創設や改正
が続きましたし、制度的な動きは一番大きか
つたんじゃないですか？^{※2}

※2 制度改革議論の成果

障がい者制度改革推進本部、推進会議（総合
福祉部会）における議論は、実現可能性など
の点で批判を受ける場面もありましたが、数
多くの成果を上げています。前号でもふれた
法制度も含めて、次のとおりです。

【制定された法律】

- 1 障害者虐待の防止、障害者の養護者に対
する支援等に関する法律（障害者虐待防止法）
- 2 国等による障害者就労施設からの物品等
の調達の推進等に関する法律（障害者優先調
達推進法）
- 【大幅に見直された法律】
- 3 障害者基本法
- 4 障害者自立支援法（2013年4月から
は、障害者の日常生活及び社会生活を総合的
に支援するための法律（障害者総合支援法））
- 5 障害者の雇用の促進等に関する法律（障
害者雇用促進法）



お、何よ？総合福祉法はなくなった
のけ？自立支援法は廃止じゃねえも
んなあ。



はい。いろいろと議論はあったので



まじくる

●制度のことでもくっちゃべるんだべよ

表：社会保障と税の一体改革・ポイント

分野	概要
子ども 子育て	いわゆる「子ども・子育て新システム」と呼ばれる、幼稚園と保育園の一元化（認定こども園）の推進と給付の一本化、保育園の待機児童対策や学童保育の増設などが盛り込まれている。ただし、新しい仕組みとしては給付の一本化が中心で、基本的には既存のサービスを量的に拡充するイメージ
年金	民主党のマニフェストで示された「最低保障年金」や「所得比例年金」については今後の議論へ委ねることとなった。現行制度の改善としては年金財源の国庫負担割合の引き上げ（約35%を50%へ）や厚生年金と共済年金の一元化、低所得の人や障害のある人への加算を創設（月額6,000円が基本）など
医療	高齢化が進展していることをふまえ、後期高齢者医療制度の見直しや在宅医療や急性期の入院医療を強化するほか、低所得の人に対する保険料軽減や高額療養費制度の改善など
介護	どこに住んでいても適切な介護サービスが受けられるよう、在宅医療や在宅介護などを組み合わせた地域包括ケアシステムを、人口1万人（中学校区）程度を単位として構築
貧困 格差	生活保護や、いわゆるワーキングプアの人への就労支援などを含む「生活支援戦略（仮称）」を策定するとともに、非正規雇用労働者の待遇改善や若者へのマンツーマン就労支援など

すが、最終的に自立支援法の廃止は見送られました。^{※3}

※3 障害者自立支援法の廃止議論はどうなったのか？

民主党により自立支援法は「廃止」という方向性が示されたことから、廃止後の新法を検討する「総合福祉部会」が設置され、「障害者総合福祉法（仮称）」のあり方が議論されるようになりました。ところが、2010年の参議院選挙で民主党が大敗すると、衆参で多数党が異なる「ねじれ国会」の状況となり、自立支援法の廃止は極めて困難となります。そういった政治情勢も含め、結果的に自立支援法の廃止は見送られ、「つなぎ」法をさらに改正して法律名称も変更（障害者自立支援法から障害者総合支援法へ改正）することとなりました。

しかし、総合福祉部会では、2011年8月に自立支援法の廃止を前提とした新法の「骨格提言」を取りまとめており、政府の判断はこれを無視することになったことから、総合福祉部会は大紛糾しました。また、政府は2010年に自立支援法違憲訴訟団と「自立支援法の廃止確約」という和解文書を取り交わしていることから、法的な責任についても指摘されています。



いやあ、分野はひれえし、内容は複雑だしよ、当事者に見てみたらたまらん。



そうですね。

だから、それぞれの分野に通じた福祉の専門家が必要とされているのだと思いますよ。



福祉の専門家ついたら、社会福祉士みてえなもんか。



資格でいうとそうですね。もちろん、行政にも制度の中身がわかっている職員が必要ですけど。何しろ、困っている人の相談に乗る人材の育成は、私の仕事にも関係しますからね。



じゃあ何よ、高齢分野なら介護保険の内容なら任せてくんやよ、みてえな相談員を養成するって感じか？（訳：そうすると、高齢分野なら介護保険のことは任せてください、という相談員を養成することですか？）



そうですね、そうですね！やっぱり、制度に詳しい専門家じゃないと、相談するほども不安じゃないですか。



そうけ…じゃあよ、そうするとジイサンが要介護で旦那とは離婚、自分は精神科に受診してて医療費の補助が必要、子どもには知的障害があるけど、保育園に預けて働かなきゃなんねえ…っていう母ちゃん、こういう専門家に相談すりゃいいのよ？



うーん…でも、とりあえずはおじいさんの介護保険が必要だから、ケアマネさんですかね？





おつ、そんで？



介護保険のサービスが使えれば、その間は動けるから、次はお子さんの保育園探しかな…でも、知的障害のあるお子さんだから、療育サービスとか発達相談も必要ですね。



ってこたあ、障害福祉の部署と子育て支援の部署に相談しなきゃなんねえってことがよ？



そつそつ、旦那さんと離婚したら、一人親の福祉制度も使えますね。



そんで？



それから、お母さん自身の精神科病院に対する医療費の補助手続きも必要になりますかね。



ふーん、で、それはそつとよ、今おめえが言った手続きすんのに、いくつ窓口に回んのよ？



ええと、おじいさんの介護保険、子どもの保育園、一人親の福祉制度、お母さんの医療費補助…だいたい3〜4か所ってところですね。



そつけ。で、その手続きは誰がすん

のよ？



そりゃ、お母さんってことになりますよね。



そつすんとか何よ、旦那と別れて気持ちが折れそうなのに、ジイサンが動けなくて、子どもを保育園に入れてでも働かねえとなんねえくらい大変な母ちゃんが、全部一人でやんなきゃなんねえの？



う…それは確かに。



おつよ、だいたいおめえの担当している「地域づくり」とか「社会的包摂」なんかに関係すんべえがな。(訳：そつでしゅ。そもそもあなたが担当している「地域づくり」とか「社会的包摂」にも関係することですよ)



えっどついついどですか？



なあ、おめえは例に出したようなケースがどんくれえいんと思ってるのよ？



うーん、いうつしゃるのは間違いないと思いますけど、個々の窓口では把握しにくいですね。



じゃあ質問変えんべ。おめえが担当

してる「社会的な包摂が必要な人」つつつのはどんな人よ？



そつですね…いくつか考えられますけど、生活上の課題が複合的に絡み合ってる困っている人、なんかは1つの典型ですよ…あ、そつか!!



んだよ、やっとわかったのかよ。「ものすげえ困っている人」つつつのは、「どんくれえ困ってるのか」すらわかりにくい人なんだよ。



そつなのか…でも、それぞれの制度には相談窓口や支援サービスがあつて、それなりに整備されてきていますよね？



そつだけどよ、人によっちゃあそれが逆効果になっちゃうわけよ…ほら、だんだん話が核心に近づいてきたべ。次回はおつちとこけえらの話をすんだべ。(訳：そつですけど、人によってはしが逆効果になってしまつので…少しずつ話が核心に近づいてきましたね。次回はもう少しこの辺りの話をしましょうか)

…というわけで、次回は現行制度の問題点や、複合的な課題を抱える人の包摂などについて取り上げたいと思います。師匠の相模弁は少しでもマシになるのか？あおい係長は読者の存在に気づくのか？…乞うご期待！(笑)



まじくろ ●制度のことでもくっちゃべるんだべよ



高校生が



先生に



聞きました②



宮崎隆志教授に 「社会教育」について聞く

大学の先生のちょっと（いっぱい？）難しい研究について高校生が聞きに行き誰にでもわかりやすく解明しようとする企画第二弾。今回は生きづらさを抱える若者たちの支援の研究をしている北海道大学の教育学教授宮崎隆志さんのところへ、地元の大通高校の女子2人（まりなとゆうな）が出かけました。

2人が通う大通高校は札幌市立の定時制高校。単位制を取り入れ、多彩でフレキシブルな授業内容やスタイルもさることながら、不登校経験者や家庭に困難を抱える生徒、発達障がいをもつ生徒など札幌全域からさまざまな生きづらさを抱える生徒たちを積極的に受け入れています。また、先生たちが外部のさまざまな専門家と連携しながら、いろいろな事情を抱えた生徒たちを親身に支えていることが特徴です。

これまで多くの困難を抱えながらも生き抜いてきた2人は「難しいことはわからないけど、勉強のために行きます!」とバイトを調整して引き受けてくれました。当日の北大は学校祭真最中。教育学部の前でたくさん出ている留学生のたくさんの屋台からインターナショナルな食べ物を買込み、本に囲まれた宮崎研究室でインタビューをしました。

まりの…もう、始めていいんですか？

…じゃあ、お歳は？

一同…笑

宮崎先生…最近、よくわからなくなるんだけど…54歳です。

まりの…え、若い。40代だと思った。

ゆうな…趣味は何ですか？ ゴルフっぽいけど。

まりの…「あら、部長さん」って感じ(笑)

—部長はいないよ。大学には(笑)

宮崎先生…今の趣味は草刈り。本当はディンキー（バスタブに帆がついたようなもの）に乗りたいたんだけど、時間が全然ない。

もともと、水産学部出身なんです。

—そうそう、水産学部で深海魚の研究をしていたんですね。

一同…へーっ

〈しばし、若かりし頃に、深海魚に魅了された過去を語る宮崎さん〉

ゆうな…水産で、大学を出たんですか？

でも、なぜか社会教育に…なぜ？

宮崎先生…水産学部（函館）に行く前に1年目は札幌にいたんだけど、学生運動が盛んな時代で「深海魚のことばかり

宮崎 隆志 TAKASHI MIYAZAKI

1958年大阪府生まれ。専門は社会教育学。コミュニティとそれを構成する人々が同時に発達するような創造的な学びとその支援の論理を検討している。最近の論文は「子どもと共にことばを紡ぐ」『日本の学童保育』2012年7月号、『『経済学・哲学草稿』における人間存在論』『北海道大学大学院教育研究院紀要』第116号、2012年など。



やっけていても、ダメだ、世の中のあり方を考えなおさなくちゃ」思つて、『セツルメント運動』に関わつたんですよ。

――聞いたことある？セツルメント。

まりの●…全然、ありません（笑）

宮崎先生●…実際にやつていたのは、近くの農村に行つて、農村の子どもたちを集めてキャンプやつたりしていたんだよね。つまりは、ボランティアみたいなものです。別に子どものことが好きだったわけじゃなくて（苦笑）、そこに行けば、大学では得られない貴重な経験ができると思つて。週に1回農村に行つていました。

他の人たちはみんな子どもたちの活動機会をサポートする気持ちでいたのに、自分だけはちよつと変わつていて「農村をどうやつて変えたらいいんだ？ 農村の課題は何なのか？」というような社会派な考えをもつていたため、みんなから浮いちゃつて。「あいつはサークルを破壊するために、学生運動のあるセクトから送り込まれた奴なんじゃないか」と噂されちゃつたりして（笑）。1年生の春の合宿中には、夜中に代わる代わる説得にやつてきて寝かせてもらえなかったこともありました。

サークルだけでなく、大学や社会に対して「おかしい」と疑問をもつような18歳でした。

――みんなと同じ年の頃だよな。

宮崎先生●…あるとき、いつも元気にしていた中学生の一人がすごく落ち込んで、将来は農家になることが夢だったのに、家が離農することになって絶望して投げやりになつていたことがわかつた。その頃、日本中お米が余り始めていて、農業の生産調整が始まつた頃で、離農せざるを得ない農家が結構あつたんだ。あちこちで、離農の話があつたので、おかしいと思つて村の実力者に話を聞きに行つたら、こつ言われた。

『今、農家を辞めるのは、力のない奴だ。残るのは力のある者だけ』

それを聞いてすごくショックだった。それは、自分がそれまで考えていたことと同じだったから。「学校でいい成績をとつて、一人前になれるのは頑張つた人だ、頑張らない人がこぼれおちるのは仕方ない」。自分も実はそう思つていた。

でも、現実には村の実力者が言つておろかというところ、そうじゃなくて。「頑張る・頑張らない」とか、「力がある・

ない」という問題ではなく、政策が変わつて振り落とされているだけで、みんなが社会の椅子取りゲームに参加させられているだけだつて。自分が今まで考えてきたことと、目の前の話が矛盾して、頭がこんがらがつちやつたんだよね。

それから、今度は逆に、社会の力に屈しないためにはみんな協力してやらなくちゃならないという思いが強くなつて、「みんなでやらなくちゃならない」と一方的な価値観を押しつけて小学生の女の子を泣かせちゃつたりしたもして…

まあ、社会の矛盾と挫折を味わつた一方的に熱い18歳の夏を過ごしたんですよ。そんな18歳の出来事があつて、社会問題に向き合つていくには人に焦点を当てるような研究をしなくちゃと思つて、ここ（教育学部）に来ました（当時の北海道教育大学へ途中で入れてくれと直談判したという話もありました…）。

ゆうな●…それで、今は何をしているのですか？

宮崎先生●…「もう一つの学びを探索する社会教育」

教育には、学校で行われている学校教育とそれ以外の社会教育があるんです。社会教育はテキストもなくて、先生もいなくて、自由に学びたいことを学ぶよう



な感じ。誰かに言われてじゃなくて、地域の人たちとか子育てしているお母さんたちとかが自分で学びたいことを考えて、先生を呼んできたりして。そうした自発的な学びの中にひよっとしたら学校の学びに役に立つことが含まれているんじゃないか？ ここからの学校の新しい形を見いだせるような気がするんだよね。

——二人は学校はどういう印象？

まりの●…最初は、ずっと行きたくなかった。中学校は嫌いだった。小学校はまだ友だちがいたからよかったけど、中学校になるとみんなのワイワイやる輪に入れなくなって、外された。大人と子どもの間だからやるのが残酷で…きつかった。

ゆうな●…学校はずっと好きだったな。

宮崎先生●…学校が好きだったら、今の話は通じなかったかな。僕は幼稚園に入ったとき「人生終わった」と思った。学校も嫌いだったんだよね。

一同●●…へー！（いかにも意外そう）

宮崎先生●…子どもながらに自由な時間を奪われるのが嫌だったの。スモックを着せられて、時間になったらカバン持たされて家から追い出されて、「これで、おやじ（当時はお父ちゃんと呼んでいた）」と同じ世界に来てしまった」って

思った。

——相当、おかしい子どもですね。

ゆうな●…すでに悟りを開いている感じ（笑）

——ゆうなは、学校好きなんだよね。

ゆうな●…もともと静内において、保育園に行っていたときは楽しかったんですけど、札幌に来たら一つ上のお兄ちゃんがちよつとやんちゃで親が大変だったから、ずっと家にいなくちゃならなくなっですごくさみしかった。学校に行くようになったら、毎日家から出かけられるようになったってみんなで遊べるし、勉強も嫌いじゃないし、すごく嬉しかった。友だちと一緒に過ごすのがやっぱり楽しい。中学も部会に入れて楽しかった。

今の高校も好きなんだけどなあ…

——学校は好きなんだけどなあ…なぜか行けない二人（笑）

ゆうな●…そうなんです。いろいろな事情があつてなかなか行けなくて…

今の高校の前に進学校にいて、そのときに仲よかった子がこすいじめに遭つて。それがひどくてその環境にいることが苦痛でいられなくなって、やめました。

自分がよければそれでいいっていう雰囲気があつて、どうしてもその雰囲気だめだった。

今はそうした悪質なじめはない。

ゆうな（大通高校2年）

しゃべることと動くことが大好き。活発で多趣味な18歳



まりの（大通高校2年）

食べることと絵を描くことが大好き。凝り性だけど、ときどき冬眠してしまう16歳



——まりのは中学校のときに、先生との折り合いが悪かったんだよね。

まりの●…入学願書を破られたり、「お前なんて高校行かなくていい」とか言われたりしました。

一同●●…えー!!それはひどい!訴えるべきだよ。

宮崎先生●…今、高校中退者の調査をしているんだけど、みんな二人と同じようなことを言うんだよ。続けられなくなる理由や事情はいろいろあるんだけど、友だちでも先生でも信頼できる人がいると困難な状況をしのげる。自分をちゃんと見ていくれる、わかってくれる存在が、つなぎとめるロープのような役目をはたしているんだけど、それがぶつんと切れると、パーッと離れていっちゃうの。

だから、先生の存在は大きいんだよね。友だちも大事だけど、全体を見渡してサポートできるのは先生だよ。聞き取り調査の中でもいろいろな先生たちの話が出てきた。熱心に頑張っている先生もいた。

——F先生だよ。二人は1年生の時に同じクラスで、その担任の先生が私にいいしてくれたんだよ。いい先生だよ。

ゆうな●…かなり。

まりの●…今もお世話になっています。

宮崎先生●…生徒の事情をちゃんとわかってくれることが大事。ある生徒は授業で朝から居眠りしていた。それは夜遅くまでバイトをしなくちゃならない状況だから居眠りしちゃうんだけど、いい先生はその事情をわかってくれて、見守ったり声をかけてくれる。普通なら「何やってるんだ!」って怒るところだろうけど。そういつた家のことや気持ちをわかってもらえると信頼するんだ。先生によつては、生徒が大変な生活状況にあつても、その実態をまったく理解せず、一般的な話を繰り返すだけ。そうなると「この先生とは相談もできない」とあきらめてしまふこともある。そんなミスマッチもけっこうある。

まりの●…今の学校に行つていいなつて思つたのが、そういう状況の人が多いから、すぐに理解してもらへる。

宮崎先生●…友だちが?

まりの●…友だちもそうだし、先生も。4割が不登校経験者なんです。

——大通高校は先生たちの理解が本当にあるよね。

宮崎先生●…大通高校つて友だちできや

すい?

まりの●…どうかな? クラス代わつたりしたときはやつぱり大変。

ゆうな●…人によるんじゃないかな。

——大通は単位制だから、他の学校とは違つてクラスのつながりが薄いんじゃない? 集団が苦手な人にはいいかも。

まりの●…一人ぼっちの寄せ集めみたいな感じ。

ゆうな●…いや、そうでもない。逆に集団でいなくちゃ無理な人が多いかも。

宮崎先生●…そうか、やつぱり集団つて大事なんだね。そういう意味では大通は集団を創るパターンが他の高校よりは多いかもね。

へし、高校生活を振り返る二人。入学当初や2年になつてクラス替えしたときの緊張感、それから共通の友だちについて語る。

宮崎先生●…クラスつて何人なの?

ゆうな●…30人ぐらい。

——同じクラスでやめちやつた人はいる?

まりの●…帰国しちゃつた人ならいるけど。



ゆうな★…絶対、自分が一番辞めそうだって思われてたと思う(笑)。「まだいたの?」って聞かれるもん。

一同★…笑

—何で、ゆうなが一番辞めそうだって思われてたの?

ゆうな★…とりあえず、勉強が嫌いそうに見えるし…

—でも、さっき嫌いじゃないって言うてたじゃない(笑)



屋台からたくさんの食べ物を買って入ったインタビュー

ゆうな★…嫌いじゃないけど、「嫌いに見える」。それと、学校に行く機会が少なくて、外見で判断されて、「おっかない」と思われるから。

まりの★…最初、おっかなかった(笑)

ゆうな★…黙ってたなら、たいてい怖いって言われる。だから、極力しゃべるようにしている。

—去年はいろいろ大変で単位が取れなかったんだよね。

ゆうな★…去年はゼロ単位(笑)。お父さんと暮らすようになって少し生活が落ち着いて、後半頑張ってたけど、最後の最後に熱出して単位が取れなかった。

—そうか、お父さんと生活するようになって、少しは落ち着いたんだ。じゃあ、今も?

ゆうな★…今でも大変。いろいろなお金を自分で払わなくちゃならないから、バイトが大変。でも、精神的には楽になった。

—二人は自分の生活費を稼いでいるのが共通点だね。結構稼いでるよね?

ゆうな★…お金が大変なのに、私は洗剤を買うのが好きで買いすぎちゃう。ドラッグストアなんて大好き。

まりの★…休みの日にはドンキホーテに行くのが楽しい。スゴイ安いし。

—二人とも、女子高生の趣味じゃないね。主婦みたい(笑)

こんな二人の話が宮崎さんの研究に何か役に立ちそうですか?

宮崎先生★…日々の生活の中でいろいろな学んでるね。たくましさを感じたけどね。まりの★…誰もやってくれないと自分ではやんなきゃって気持ちになる。

—でもさ、誰もやってくれないと、嫌になつてぐれちゃったり、つらくて引きこもっちゃったりする人もいるけどね。

まりの★…私は引きこもってた。去年少し。誰とも関わりたくなくて。

ゆうな★…誰とも関わりたくないと思うこともあるけど、1日で耐えられなくなる。

宮崎先生★…引きこもっているとつらいの?

まりの★…ずっと一人でいるから、誰もいい意見を言ってくれる人もいないから。話を聞いてくれる人もいないから。一人でずっと考えてると暗いほうにばかり考えがいつちやって。落ちていく。

宮崎先生★…そのときはつらいんだ。

まりの★…つらかったですね。



——まりのはけっこう、あきらめの境地で生きてきた感じだね。

まりの●..そう。何でもあきらめてきた。「あきらめ続けて今まで生きてきました」って感じ。

——まりのは支援で登場する大人への見る目がシビアだね。

まりの●..話を全然聞いてくれない人にあたったときは最悪だった。自分のほうを全然見てくれない。大変な思いをして助けてもらったはずなのに「あなたが、悪い」って言われた。

一同●..それは、ひどい!!

ゆうな●..うちの兄ちゃん結構悪いことたくさんやってたけど、すごい支援者に会ったときにびっくりするほど変わったことがある。その人はいい人だった。やっぱり、人によって違うよね。

宮崎先生●..二人が思う『いい人』ってどんな人?

ゆうな●..理解力のある人。自分の知っていることだけを、自分が正しいと思うことだけを、押しつけるだけの人はいい人ではないと思う。確かにそれが正解かもしれないけど、みんながみんなそう思う考えでもないし。「あなたの気持ちも

わかるよ」って受けとめてくれる人。一回受けとめたうえで、理解してくれる人。まりの●..否定語をあまり使わない。まずは聞いてくれて、受けとめてくれて、一緒に考えてくれて、ひっくり返して「こういうのもあるよ」って新しい考えをくれる人。視野を広げてくれる人。

——そういう人を育てるにはどうしたらいいと思う?

まりの●..やっぱり、大きなことを一回経験しないと、浅い考えだけじゃだめだと思う。

ゆうな●..いろんな経験が大事だね。

まりの●..若いうちにいろいろやったほうがいいよね。

——二人がこれまで学んだのは、何をとおしてかな?

まりの●..接客業をするようになってから。

ゆうな●..バイトは大きい。高校が変わったのも。バイトで出会った人を通じてかな。学校、バイト、人..やっぱり人かな。まりの●..高校はあまりシビアな競争がない。和んだ感じがいい。

ゆうな●..前に行ってた進学校は勉強でも部活でも競争が前面に出ていたけど、大通高校はそんな感じがない。

まりの●..中学校のときもピリピリしていた。勉強できないと本当に先生からの風当たりもひどかった。

〈しばし、ゆうなの家族の話に聞き入る。〉

——ゆうなは完全にお母さんのだね。保育園の弟の面倒見たり、お兄ちゃんを助けたり..。

ゆうな●..でも、そういう経験のおかげで成長した部分はあると思う。試練は大事。

——『試練が大事』っていうのは宮崎さんの研究的にはどうなんですか?

宮崎先生●..でも、最初から『試練が大事』って思っていたわけじゃないでしょう? ゆうな●..気づいたら、つらいのが当たり前だった。これが普通なんだろうって思っていた。

中学校入るくらいまでは、あまりにもつらいことが多すぎて、これが当たり前だと思っていた。でも、思春期ぐらいになつて周りを見渡すと:「あれ? これって違うのかも」って思い始めた。そして、あまりにつらいことがわかり過ぎて一度落ちちゃった。

まりの●..私は、小4から中2まではず



つとつらかった。母と二人だったから補いきれない。いつべんにガーツと言われるとわからなくなっちゃって。言われたことが消えちゃって、リセットされるようになった。言われたことが消えちゃうから、ますます親が憤慨して怒られて…

—それは、自分を守るためにリセットする機能を付けたんだよね。でも、守ってたら余計に怒られちゃったんだ…

まりの●…中学の途中は本当につらくて、ずっと死にたいって思ってた。変わるきっかけは児童相談所と関わったこともあるかな。少しずつ、割り切れるようになった。

ゆうな●…家族と仲が悪いのはつらいなあ。かなり。

まりの●…仲のいい親子を見るだけで、にらんだりしたこともあって。そしたら顔つきがだんだん悪くなるのがわかって。「やあ、もうやめよ」って割り切って、自分は自分でいいんだと思えるようになった。楽になりたかった。

—割り切ってるんだね。現実が変わらないからね。

まりの●…自分が気にしなければいいってことがわかった。

ゆうな●…すごい、それわかる。

—私がこの二人を宮崎さんに会わせなかったのは、宮崎さんが「生きづらさを抱える若者の支援」の研究をしているから、実際に生きづらさを抱えている若者とどんな話をするのかな？ と思ったから。どう、二人は、将来のビジョンとか夢とかもててる？

ゆうな●…え!? 夢、夢か。早く結婚したい。子どもが好きだから。

まりの●…保育士とかいいんじゃない？

—学校の先生とかは？

ゆうな●…いや、人があまり好きじゃないから、深く関わるのはちょっと…

宮崎先生●…でも、すごい自己分析力だよ。その分析力を活かしたらいいんじゃないかな。

—そうだよ。この二人の分析力はすごい。

宮崎先生●…同じような経験をしている人の相談にのったりもできそうだね。

ゆうな●…そういえば、友だちに相談されることは多いかな。そうか、そういうのを活かして仕事をするって方法もあるかあ。考えたことなかったかな。

—私としては、こういう二人のような人が支援者になってほしいのね。こついう二人がちゃんと社会に出て活躍できるようにするためにはどうしたらいいですかね？ 宮崎さん。

宮崎先生●…さっき、二人がいい人は理解してくれる人、わかってくれる人って同じことを言ってたよね。そういうのを知っている人が支援者になるのがいいよね。支援者というのは「知っている人」で、「知らない人」に知っていることを教えてあげるのが支援だと思っていると、そうするとだいたいうまくいかない。

まりの●…話を聞かない大人は多いですよ。

一同●…爆笑

宮崎先生●…話を聞かないんじゃないじゃなくて、聞けないんだよ。聞けなくなっちゃうんだ。自分は正しいって思うから。

ゆうな●…頭が固い大人か。押しつけられるなんて、誰だって嫌なのに、押しつけていることに気づけないのは困る。「ちよつと待って、自分が逆だったらどう思う？」って。相手の立場に立てばわかりそうなのにな…

まりの●…そういう面では、大通高校は相手の立場に立つ経験がたくさんできると思う。



宮崎先生…自分の考えを言うだけなら

楽なんだけど、相手の意見を受け入れる
となると、そのほうが力があるんだよ。

二人がづらい経験も大事だったって言
えるのは、聞いてくれる人がどこかにい
たんじゃない？ 仲間とか。そういう、
受けとめてくれて一緒に考えてくれる人
がいたんじゃないかと推測するんだけど
…どうだろう？ 押しつけてるかな？
(笑)

へしばし、宮崎さんの集団適応できなな
った暗黒の学校時代の話を聞く…

—今日は逆インタビューになったね。
設定と逆で「宮崎先生が高校生に聞きま
した」になっちゃった(笑)

宮崎先生…高校中退したり、引きこも
ったりした人たちの話を聞くと、私自身
が学校が嫌いだったり集団になじめな
かった経験があるから、気持ちがすごくわ
かるの。そして、「そういう経験をした
ことのある人の中にこそ本当のことが必
ずあるはずだ」って思う。「本当のこと」
って難しいんだけど。

まりの…「本当のこと」って何ですか？
宮崎先生…うまくいえないんだけど、
「本当に本当のこと…真実？」

一同…爆笑

—それじゃ、全然わかりませんよ。大
学の教授なんだから、ちゃんと言葉にし
てくれなくちゃ。二人の方がよっぽど言
葉にしてるし(笑)

宮崎先生…いやいや、(二人に)教え
てください(笑)。

さつき、自分たちの経験を「つらい」つ
て言っていたけど、恥ずかしいとは思わ
ないでしょ。

まりの…人には言えないことはあるけ
ど、恥ずかしいとは思わない。

ゆうな…中退とかもあるけど、そうい
う経験があるからこそ、今の自分もある
し、この先に役立つと思える。

まりの…まわりは固定概念にとらわれ
過ぎている。

宮崎先生…「本当のことは」、つまり「人
が生きるときに見失っちゃだめなこと」
かな。そういうことをあまり大事にしな
くても何となく生きることでもできるじゃ
ない。でも、二人はちゃんとそれを知っ
ている。「いい人」がどんな人かもわか
っている。

—「いい人」ってどんな人かを二人の
ように答えられる人はそんなにいないか

もよ。「頭のいい人」とか「偉い人」と
か言っちゃうかもしれない。

まりの…優しい人とか？(笑) 絶対、
そういう人って裏表あるって思っちゃう。
「でも」ってことが口癖な人はちょっ
と無理。

ゆうな…でもね。そういうことを言っ
ちゃう人にもわけがあるんだよ。どんな
人にもそうなった理由があるってとらえ
ると、意外とそういう人とも仲よくなれ
るよ。

まりの…そこまでは、ちょっと余裕が
ない。

ゆうな…あのね、それは年を重ねてい
くと、そういうふうに思えるようになる。
一堂…その1歳の差が大きいんだ
(笑)

宮崎先生…さつき言っていたいい人は
つまりはそういうことなんじゃない？
「なんだ、こいつ！」と思う人を一方的
に責めるんじゃないくて、「どうしてか
な？」と考えると興味が湧いてくるよね。
ゆうな…そうなんです。理由を考え
るといろいろ事情がある。その人によっ
ていろいろあるから、人と深く関わって
いくといろいろわかっていく。
まりの…視野が広がっていく。
ゆうな…うん、うん。



——二人とも自分の言葉をもってるよね。

ちゃんと自分で考えて、自分の考え方や意見を言うよね。そういう大人は意外に少ないんだよ。大人とか支援者ってすぐ一般化しちゃって「こういうもんだ」という話をするから、その人が何を考えているのかが伝わってこない。

宮崎先生 ・・・つい最近、そのことを原稿

に書いたばかりなんだよ。「届く言葉」と「届かない言葉」があるって。今の話は「届かない言葉」の話だね。その人と話していてもその人が見えないっていう言葉だよ。その人がどういう人かが伝わってこない。「届く言葉」はその人の全存在と密接につながっていて、そういう言葉を通してその人が見えてきて、どんな人かがわかるし、出会える言葉なんだよ。でも、大多数の人が一般化された言葉でコミュニケーションをしようとする。そうすると自分を語る言葉ももてなくなる、そして自分がなんだかわからなくなっていく。通り過ぎていく先生の言葉と、ずっと落ちて心に残る言葉があると思うんだけど、それらは何かが違うんだよ。…そういうことを研究していきます（笑）。

学部のパンフレットにも書いているん

んだけど、いろいろな経験をしてきた人たちがそれを取り越えて、「ピンチをチャンスに変える」学びって何なのかということを考えています。

——今日の話はまさにピンチをチャンスに変えてきた二人の話じゃないですかね。

私が気になるのは「なぜ、二人はピンチをチャンスに変えられたか？」ということですね。

宮崎先生 ・・・やっぱり、それは理解してくれる人、聞いてくれる人との出会いだと僕は思うのですけど…

ゆうな ・・・理解してくれる人ももちろん大事だけど、そうじゃない人の存在も大事だと思う。いろいろな人との出会いそのものが必要だし、意味があると思う。

宮崎先生 ・・・本当にいろんな人がいるってことは大事で、いろんな感じ方ややり方があることでいろいろなことが解決したり、成長し合うことが可能になるんだよね。みんな同じだったら、みんなでピンチになって困っちゃうしね。

——二人は今日どうだった？

ゆうな ・・・いい人生経験になった（笑）
なかなかこんな話、友だちとすることなんか少ない。貴重な経験になりました。

まりの ・・・ゆうなとほとんど話したことがなかったから、知り合えてよかった（笑）。

自分が嫌だと思う人ともう少し頑張っつてつき合ってみようかなあと思えるようになったかな。

宮崎先生 ・・・若者とか子どもも、大人と同じ社会に生きている。子どもや若者も知識や経験は少なくてもそれなりになんか変だと思ったり、考えたりしている。だから、大人も子どもや若者から学ばなくちゃならない。そうした子どもや若者と大人が学び合う機会を創っていく必要があるんだよね…結局、何を研究しているかはわかったのかな？

まりの ・・・いやあ、よくわからなかったかなあ（笑）

でも、人と関わることをやっているのはいいなあと思った。

宮崎先生 ・・・人との関わりの中で、人が成長し合ったり、お互いに学び合うってことだよな。

まりの ・・・一方的じゃうまくいかない。

——実際には人と人との関わりは少なくなっているからね。いろんな出会いを意識してこれからはどんどんつくっていかなくちゃならないですね。



予告

第4回まじくるフェスタ in 北芝 3月9日（土）、10日（日）に開催！

全国から多様な「生活当事者」が終結して、それぞれの語りを売る屋台を地域の中に出店します。地域の特色もあり、分野のカラーもあり、それぞれが持ち味を活かした屋台でご当地グルメとご当事者トークを販売し、参加者は地域通貨にて購入することができます。

全国からの参加者と地元の暮らしづくりをしてきた北芝の人たちが混ざり合って、それぞれが語り合い、聴き合う、ドキドキわくわくの企画。

詳しい参加の呼びかけは年末年始あたりに広報予定。

まずは、3月9・10日は大阪府箕面市北芝地区に集結しましょう！



今年度も調査研究事業を活用して情報整理、発信をすることができました。

時代が急激に変化し、支援策が追いつかずに、地域でさまざまな当事者や支援者が奮闘している今日、もっとも大切で必要とされているのは“正しい情報を自分たちの目線で発信すること”だと思っています。発信の作業は、いろいろな人たちが語り、自分が生活の中で感じてきたこと、感じていることを言葉にする貴重な機会になり、その言葉がこれからの社会をつくりなおしていく、知恵や原動力になります。（ひおP）

編集アクター

【編集スタッフ】 日置真世 高橋信也 秋田照洋 まじくるん

【原稿執筆協力】 朝比奈ミカさん、又村あおいさん、櫛部武俊さん

鎌田憲彦さん、伊藤敬洋さん、高橋護渉さん ほか地域起業創造センターまじくるスタッフ

【取材協力】 熊木正人さん（厚生労働省）、

釧路フィードバック研究会メンバーの若者たち、

大友愛美さん、tunaさん、平迫なおこさん、

宮崎隆志さん（北海道大学）、 まりの、ゆうな（以上、札幌市立大通高校）

【イラスト協力】 深田堅二さん、加藤開さん、高橋信也さん 市川りんたろうさん

【表紙デザイン】 石原雅彦さん

社会・地域・暮らしをつくりなおすマガジン まじくる

発行日 2012年12月20日

発行 特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロン
<http://n-salon.org/>

連絡・お問い合わせ先

〒085-0824 釧路市柏木町2-8

電話 0154(42)2420 地域起業創造センターまじくる

E-mail center@n-salon.org

平成24年度厚生労働省社会福祉推進事業
生活困窮者の「当事者参画型自立促進体制」構築事業



制作 七七舎

社会・地域・暮らしをつくるマガジン

まじくる



平成 24 年度厚生労働省社会福祉推進事業
生活困窮者の「当事者参画型自立促進体制」構築事業